

(語釋) 三月の下旬にて、爰る春は、幾日もあらねば、雨の降るに、強ひて、この藤の花を折りて、たてまつる事よとなり

(八十段)むかし、左のおほいさうちぎみ、いさうかりけり。賀茂河のほとり、六條わたりに、家をいとおもしろくつくりて、すみたまひけり。

(語釋) 左のおほいさうちぎみとは、左大臣の事なり。こゝは、左大臣、源融公のことなり。公は、醍醐天皇、第八の御子にして、承和元年に、元服し給ひ、源姓を賜はりき。嘉祥三年、従三位に叙せられ、貞観四年、左大臣となり、寛平七年、七十四にして、薨せられ、正一位を賜らる。此の公の河原院は、六條、坊門の南にありき。こゝは、其の家をいさなり○古今集の「君まさく煙たえにし鹽がまの、うらさひしくも見えわたるかな」といふ歌の註に、顯昭がいはく、河原の院に、いみじき家を造りて、池をほり、水をたへて、潮を毎日三十石づゝ汲み入れて、海底の魚貝等を住ましめたり。陸奥の國のしほがまの浦をうつして、艇の陸やく屋に、煙をたゝせて、玩ばれけるなり云々と見えたり。なほ、源順の、河原院の賦にも、此のこと、委しく見えたり

かみな月のつてもりがた、きくの花うつろへるさかり、もみちのちくさに見ゆるなり。

(語釋) かみな月は、陰曆、十月をいさ○うつろへるさかりとは、衰へうつろふ最中をいさにかみと○ちくさは、千種(せんしゆ)の義にて、紅葉の、こく薄く、さまじくに見ゆるをいさ  
みこたちおはしまさせて、夜ひとよ、酒のみしあそびて、夜あけもてゆくほどに、

此の段のおもしろきをほむる歌よむ。そこにありけるかたおおきな、板じきのしもにはひありきて、人にみなよませはて、よめる

(語釋) 夜ひとよは、夜をほしなり○酒のみしは、酒宴するをいさ○夜あけもてゆくは、夜の漸く明くるをいさ。もては、かろく見るべし○かたおおきは、下賤の翁の義なり。かたおは、もと、乞食といふ語なれど、轉じては、卑賤なるものをいさ○板じきの下とは、疊をしきたる次なる板敷の、其の下の方の地上をいさ○人に皆よませせて云々、卑賤なる翁なれば、人にできぬやうに、皆、人のよみたるのちに詠むさまなり

しほがまにいつかさけけん朝なぎに

釣する船はこゝによらん

(語釋) 朝なぎは、朝の間の波のなきて、穩かなるをいさ○よらんは、書れかしといふ意なり○一首の意は、こゝをまことの鹽竈の浦に見たて、この遠き陸奥のしほがまへ、何時の間にか、我は來にけん。今、朝なぎのけしき、いはん方なし。定めて、この朝なぎを機として、釣する船も出づるならん。其の船、こゝによれかし。又、一層のなかめならんとなり

となんよみける。みちの國に、いきたりけるに、あやしくおももしろき所をおほかりけり。わがみかど、六十餘國の中に、しほがまといふところに、似たる所なかりけり。さればなん、かの翁、さらばこゝをめで、しほがまに、いつかさけけんとは、よめるなりける



(語釋) みちの國にいきたりけるには、彼の翁の、はやき時、陸奥に行きて見たらしゆゑに、かくはしへるよしなり。○わがみかどは、我が朝をいふに同じ。○似たる所なかりけり。此の浦の風景、殊に勝れて、他にこのけしきに似たる所もなしといふ意なり。○さればなん云々は、六十餘國に、似たる所もなきほどの勝地なれば、彼の翁、まことのしほがまなりともおもひて、此の歌をよみたるは、ことさらに、こゝをめでての事なりと、記者のいへる詞なり。

(八十一段)むかし、これたかのみ子と申す御子おはしましけり。

(語釋) 惟喬の御子は、文徳天皇、第一の皇子にて。御母は、紀の静子、正四位下紀の名虎の女におはせり。此の親王は、承和十一年にうまれ給ひ、貞觀十四年七月に、出家したまひ、法名を算延と申しき。おほ、總論の處に、委しくいへり。参考すべし。

山さきのあなただに、みなせといふところ、宮ありけり。年ごとの、櫻の花さかりには、その宮へなん、おはしましける。

(語釋) 山崎は、山城の國、乙訓の郡にて、水無瀬も同じ所なり。類聚國史、三代實錄等に、水生とある所なり。こゝに、惟喬親王の御別業ありて、櫻のさかりには、必、おはします例なりきとなり。

其の時、右の馬のかみなりける人を、つねにわたおはしましけり。時世へて、久しくなりければ、其の人の、名をすればけり。

(語釋) こゝの右の馬は、業平朝臣なること、下の歌をよみて、明らかなり。まよひ、ことごとく、其の名、忘れにけりといへるは、かへりておもしき。

かり、ねんころれもせで、酒をのみみつゝ、やまと歌にかゝれりけり。

(語釋) かりは、鷹狩といふ。一説に、こゝのかりは、あまり突然なれば、櫻がりの意にはあらじかといへど、なほ、鷹狩の事に見る方よし。此の物語は、極めて文を省きたるかきさまなれば、こゝも、例の省きたるなり。それは、水無瀬、交野あたりは、名高き狩場なれば、親王の別業と、こゝに立て給へるも、狩に便ならんがためなるべし。されば、其の所にゆづりて、殊更に、狩の事をいはぬなり、さて其の目的なる狩は、かたはらになして、心をとめてもせぬよしなり。○やまと歌とは、唐詩に對していふ事なれど、うつりては、たゞ、歌といふべき處にも、かくいふなり。こゝも然り。今かりする、かた野のなきさの、おんのさくら、ことね、おもしき。その木のもどにありて、枝を折りて、かざしにして、かみなかしも、みな、歌よみけり。うまのかみなりける人の、よめる。

(語釋) 古意に、こは水生より、河内の國の交野郡の交野に至りて、狩りしたまふなり。こゝは、天皇の御狩場なれど、まだ、其の頃は、禁せられざりしか、又、一の御子なれば、心にまかせて、遊びたまふか。さて其所の渚の院は、度々、御狩あるゆゑに、離宮めきたる院のありしにや。此の親王のは、既に水生にあれば、又はあらじかし。此の院のなまは、土佐日記にも見たり云々といはれたり。○ありては、馬よりなり。○枝を折りてかざしにして云々、櫻の枝を折りて、頭をかざすは、たゞ、花を賞翫するしわざなり。

世の中れたえてさくらのかさじは



春のころはのどけからまし

(語釋) のどけからましは、閑けくあらましなり。のどけは、今言た、ユサ／＼したる春なり。○此の歌、今古集にも、土佐日記にも出たり。○一首の意は、さかぬほは、咲をまぢ、咲く時は、散るをまぢみ、盛なるほは、雨をいよひ、風をおそれなを愛するあまなり。心のいとまなきより、なすて世に櫻といふもの、絶えてなくば、春の心は、なかく、のどけならんとなり  
となんよみたりける。又、人のうた  
ちればこころいとさくらほめたけれ

うき世になにか久しかるべき

(語釋) めでたければ、今言た、結搦なれなといふに同じ。○此の歌は、前の歌を承けて、君は、櫻の花が、早く散るゆゑに、心のどかならず、わろしとのたまへ。我は、なほ思はず、櫻は結搦なるものなるうへに、散ればこそ、いとよけれともふなり。その故は、此うき事おほき世に、さうしてか久しくあるべき。はやく見きりて、散るも道理よとなり。○右の二首は、此の親王、つひに、世を遁れ給ふ前兆のやうにつくれるなり。この親王、御位に即きたまふべかりしを、其房大臣のはからひにて、弟の惟仁親王の立ち給ふ勢なりしかば、御不平の事ありしは、既に總論に述べしごとく入るが如し。参照して事實を知るべし  
とて、その木のもとはたちてかへるに、日ぐれになりぬ。御ともなる人、酒をもたせて、野より出できたり。この酒をのみてんとて、よれ所をもとめゆくり、あまの

河といふところに至りぬ。

(語釋) 御ともなる人云々、此の人は、落の院に従ひまわりたる人にはあらで、これも、御供なる内の人、水無瀬の宮より、直ちにまねれる人をいふ。○野のかたより云々は、落の院の方にはあらで、野の方より出で来たりの意なり。酒をもたせて来たるは、もとの酒の盡きたらんことをおもひてなり。○あまの河は、交野の近邊にあり  
みこに、馬のかみ、大御酒まいる。みこののたまひける、かた野をかりて、あまの河のほとりにていたるを題にて、うたよみて、さかづきはさせとのたまひければよみて、たてまつりける

(語釋) 大御酒は、神、また、貴人にまゐらす酒をいふ。○まねるは、まゐらすといふ義にて、  
献るをいふ

かりくらししたなばたつめにやどからん

天のかはらにわれはきけり  
(語釋) かりくらしは、持尊し居ての義なり。○たなばたつめは、織女をいふ。○天の河原は、天上の天の河原にとりなしたるなり。○一首の意は、天の河原は、織女の家ある處なれば、わざと、持りくらししてその織女に、宿からんとす  
と聞こえければ、此の歌をみて、かへすく、すしたまひて、かへこえしたまはず。紀のありつぬ。御供につかうまつれり。それがかへし







んと、待ちかぬるよしなり。さて歌をよめるなり  
枕とて草ひきむすぶ事もせし

秋の夜とだれたのまれなくに

(語釋) この舊註、まち／＼なり。新釋の説よろし。其の要にいはく此の歌の意は、日頃、旅にありつれば、今宵は、家にかへるべし。とぞめ給ふとも、かりそめの枕をさうて。せめて、秋の夜となりとも、たのみにすべき長夜の頃ならば、今しばし悠々としても、宜しければ、三月の短夜の頃にてさやうに、たのまれぬに、かくひきむすぶ給ふは、つらし。はやく、御暇たまへさうを意せ、いひのこしたるなり。草ひきむすぶ事もせしとは、かりそめの枕をせしとさうを意せ、旅に出たるをり  
の事なれば、草枕に思ひよせて、さへるなり。こよひは、たまらばとさうを意たすありける。秋の夜とたのむとは、秋の夜ならば、悠々としても、夜長なれば、たのみにせらるゝさう。たのまれなくには、たのまれぬにさうを意なれば、いひのこしたる詞にて、かくとぞめ給ふは、つらし。はやく、御いとま給へさうを詞の外に殘れり云々

とよみける。時は、やよひのつごもりなりけり。みて、大とのごもりで、あかしたまひてけり。

(語釋) 三月のつごもりなりけりとは、春の短夜の頃なるをしらせたる文なり○大とのごもりは、大殿籠らでなり。貴人のいね給ふを、大殿さるるといふ。親王が、かく大とのごもりで、酒宴をなして、夜をあかし給ふは持城のまごり、飽かずおぼしてなるべし

かくしつゝ、まうでつかうゆつりけるを

(語釋) かくしつゝは、かく御侍の御供は、更なり。かへらせ給ひても、終夜、御酒宴の御物語などして、仕へ奉りきとなり。古意には、親王の大殿でもらであかし給ふは、出家し給はんとて、名殘を惜しみたまひしなりといはれたれど、新釋には、「枕とて」の歌よみしは、出家し給ふ時とは、年月へだれりといへり。いづれに見ても、ありぬべし

思ひの外に、御くこちろとせ給ひて、小野といふ所に、すみ給ひけり。

(語釋) 思ひの外は、案外の義なり。惟喬親王は、第一の御子にて、世の御おぼえもあはせるに、出家し給へれば、馬の頭の案外に覺えたるよしなり。三代實錄に、貞觀十四年七月、惟喬親王、寢疾頓出家、爲沙門とあり。此の時、御年二十九○小野は、山城の國、愛宕の郡なり

む月夜をがみ奉らんとして、まうでたるに、ひるの山のふもとなれば、雪いとたかし。まいて、みむろに、まうで、をがみ奉るに

(語釋) 月夜は、陰曆、正月をいふ○雪いとたかし云々、雪のたかく積りて、なれぬ都人のあゆみかねたれど、こころをしのあかければ、強ひて、あゆみて、御室に詣でたるなり

つれ／＼と、いともものがなしくて、おはしほしければ、やゝ久しくさむらひて、いじへの事など、思ひ出で、聞てゑとせけり。

(語釋) つれ／＼は、徒然の義にて、なすむさもなく、おはしほすは、さうさう○ものおなはしは、何となく、悲しきよしなり。正月にて、世は公私とも、何くれとさうをさした、徒然ならんは、たはす



るが、もの悲しきなり○さしへの事とは、水無瀬、交野に狩り給ひしことなるは更なり。すべし世に勢のおはしける時の事をいふ。これ、惟喬親王の世を懐りまして、厭避したまへる事をあらはせるなり。これも、總論にさし入り

さても、さむらひてしがあとおもへど、ればやけ事どもありければ、えさむらはで、夕ぐれにかへるとて

(語釋) 今宵は、こゝに止まりて、御物語したく思へど、去り難き公事ありて、其の日の夕ぐれに歸るなり。正月なれば、公事のしげきこと、似つかはし

わすれては夢かとお思ふおもひきや

雪ふみわけて君を見んとは

(語釋) おもひきは、兼ねて思ひて、ありけるやはの意にて、案外なるをいふ○天皇の御位もつきたまふべき君の、山里の雪の中、つれくとしておはするを見て、こは夢かとおもふことなりとてなん、なくなき、きりける

(語釋) 泣きながら歸り來にけりとなり。この詞にて、歌のこゝろ、さしあはれたるゆゑは、例の作者の巧なるなり

八十三むかし男ありけり。身はらやしながら、母なんみこなりける。その母、長岡といふところにてすみけり。

(語釋) 身はらやしながら云々、こゝろのらやしは、下賤の義にあらす。官位のみくまをいふなり。

時に、業平朝臣のことといふ○母なんみこなりけるは、業平朝臣の母は、伊登内親王なれば、かへる。さて伊登内親王は、桓武天皇第八の皇女なり。業平朝臣の御父は、阿保親王にて、御母も、内親王なり。しかるに、時勢を得ずして、つひに、身をはあらかし、世をいとひたることは、總論にさし入りお如し

子は京にみやづかへしければ、まうづとしければ、まはく、えまうです。ひと、子にさへありければ、いとかなしうしたまひけり。

(語釋) まうづとしければ、詣でんとしければなり。心にかけて、詣でんとしければ、官任いとまなかりしかば、たびくも詣ですとなり○ひとの子にさへありければ、殊に、寵愛せる意なり。業平朝臣は、伊登内親王の一人子なればなり。三代實録に、業平者、故四品阿保親王第五子、正三位行中納言行平之弟也、阿保親王娶桓武皇女伊登内親王、生業平云々と見えたり。業平と行平と、父の同じきことは、更に論なけれど、母は異なりて、伊登内親王の御腹には、業平一人なりしなり○かなしうしたまふとは、殊に、勝れて愛し給ふ義なり

さるほどに、まはすばかりに、とみの事とて、御文あり。おとろきて見れば、ことごとばなくて、

(語釋) さるほどには、然ある程になり○しはすは、陰曆、十二月をいふ○とみは、頼の字をまつ。にはかなるをいふ。こゝは、急なる事とて、御消息ありきとなり○ことごとばなくてとは、異事なくての義なれば、他の事はなにもなく、たゞ、つぎの歌のみありきとなり



あらぬればあらぬわかれのありとらへば

らよく見まほしき君かな

(語釋) たらぬわかれとは、去りがたく、逃がれ難き、別の意にて、死別をいふことよ。は、備の二つある上下、今やひとつ添はるやうの意ある詞なり。見まほしきは、見たく思ふの意なり。此の歌、とみの事として「なほあるをあるをた、伊登内親王が、病に臥し給へる時の歌なるなり。○一首の意は、若しぬれば通れがたき死別をいふ事のありとらへば、たらぬたに逢ひたきて、らよく君には逢ひたく思ふことよとなり。

となんありける。これを見て、馬にものりあへず、まゐるとして、とらたう。うちなきて、みちすがら思ひける。

(語釋) 馬にものりあへずは、馬に乗るひまもなくなり。京より長岡は遠ければ、馬にて往くべき下、馬に草飼を暇も、必ずとがれて、出で往きしとなり。○みちすがらは、道々なり。このあたり、文、簡にして意をわかし。

世の中にとらぬわかれのなくもがな

千世もどりのる人の子のため

(語釋) かなは、例の願望の意なり。○人の子とは、たゞ、子とらる意にて、こゝは、自分のことなり。○一首の意は、世の中に、通れがたき死別をいふことでは、なくもがな。千世もどりのる人の子のためが身のためとなり。

(八十四)むかし男ありけり。わらはよりつかうまじりける君、御ぐごあつたまひてけり。

(語釋) つかうまつりける君とは、時に惟喬親王を申せるなり。業平朝臣は、惟喬親王より年まほり。ふれば、わらはよりつかうまつるとは、いふまじりければ、かく事實をあらぬまはたかきまはらしたるは、例の作者の心しらばなり。

む月には、かなならず、まうでけり。おほやけの宮つかへしければ、つねには、ままうです。されど、もとの心うしなはで、まうでけるになんありける。

(語釋) まうでは、貴き人の許へゆくをいふ。こゝも、親王なればいふ。正月は、今の世にも、人のもとへ禮にゆく事あれば、其の心にて、必、まわれりとなり。○もとの心うしなはで云々、惟喬親王にははじめより仕へ奉りしことなれば、親王、御出家の後も、もとの心を失はずして、訪ひ慰めまわらせきとなり。

むかしつかうまつりし人、ぞくなるせんじなる。あまたまわりあつまりて、む月なれば、ことだつとて、大御酒たまひけり。

(語釋) せんじは、前にいへる如く、禪師にて、法師をいふ。されば、ぞくなるせんじなるとは、俗人と、法師をいふなり。○ことだつとは、常に異なるをいふ。正月なれば、つねの月には、異なるをて、御酒たまひきとなり。

雪こぼすがごとふりて、ひねもすにやます。皆、人あひて、ゆきにふりこめられた



りといふを題にて歌よみけり

(語釋) 雪をほすがことは、雪のいたく降りて、入れたる物をこぼすが如くなるをいふ。こぼすは、如くならぬ。ひねもすは、終日の意なること、前下いへり。かく大雪なりしかば、人皆杯をいくたひもめづらして、酔ひきこなり

おもへども身をじわねばめがれせぬ

雪のしもるまわがこころなる

(語釋) おもへどもは、こころ、何時までも、まらんとおもへどもなり。身をじわねばは、こぼす助辭にて、身を分けねばの意なり。まのゆきは、此に止まらんとおもへども、宮仕にまわがこころ身なれば思ふにまかせず、身をまわつに分くることもならねばなり。めがれせぬは、巨離せぬて、目ではなたすよく見るをいふ。○一首の意は、惟喬親王の御許に、まらまらまらまら思入る、宮仕する身は、思ふやうにまかせず、つくづく見て居る、このゆきの積もりて歸りがたくなるを、我が本意にはめりけるとなり

とよめりければ、みこころとらたうあはれがりたまうて、御うぬきて、たまひけり

(語釋) みこは、惟喬親王を申す。○あはれがりては、歌のおもしろきを覺し給ひてなり。○御うは、御衣なること、既にいへり

(八十五)むかし、いとわかき男、わかき女をあひらへりけり。おのく、おやありければ、つらみて、いひこしてやみけり。年比へて、女のもとより、猶この事と

げんといへりければ、男、うたをよみてやれりけり。いかにおもひけん

(語釋) わかき男とは、幼き男といふ義なり。わかき女も同じ。○いひらへりけりは、契らんといひよりしなり。こゝは、男の方より契らんといひよりしなり。されど、當時は、互に親ある身なれば、恐れ包みて、いひ出で、止みしが、年を経て、今度は、女の方より、猶、この事、除られず、しとげんといひやりしかば、男、いかと思ひけん、かゝる歌をよみて、やりきとなり。○いかにおもひけんは、女の心をいかにあらず。男の方にかけて見るべし

今までにむすれぬ人は世にもあらじ

おのがさまぐ年の經ぬれば

(語釋) こゝの解、新釋よし。其の説にいはく、歌のこゝろは、猶、この事とげんをのたまへば、いひかはさんとしてたりしは、互に幼きほどの事にて、其の後、異男にあひ給ひなど、おのがさまぐ年の經ぬれば、今までに、あすれぬ人は、世にあらじ。君もあすれ給ひしものにて、今、また、おやうたにいたまひても、まことに思ひ給ひてのことにはあらじ。たのみ難しといへるなり。さるは、はじめいひかはさんとしたる中なれば、かく女の心を疑ひたる歌は、よむまじき事なれば、いかにあもひけん、はした記者の詞をそへたるなり。心をつくべし。おのがさまぐとは、此の女、その後、こと男にあひて、あすれられなして、又、はじめいひしたる男にかたらはんとしたるものとぞ思はる。さるからに、かく疑ひたる歌よみて、やりて、やみたるなり云々

とてやみけり。男、女のあひはなれぬ宮づかへんなん、出でたける



(語釋) 男、女をなにも思はず、其の女の居る、ひとつ所へ、宮づかへて出せけりとなり○あひはなれぬは、一つ宮をいふなり

(八十六)むかし男、津の國、うばらの郡、あじやの里に、こゝるよこきて、いきて住みけり。むかしの歌に

(語釋) こゝるよこしてといふ意は、初段下くはこゝるなり。参考すべし○むかしの歌には、たゞ、古歌にといふ意なり

あじのやのなだのまほやきいとまなみ  
つげのをらしもさすきにけり

(語釋) この歌は、萬葉集、石川郎女が歌に、「しかのあまはめかりしほやきはいとまなみ、くしびの小櫛よりも見なくに」とありて、筑前の國、しかの海人をよめるなるを、所をかへ、詞をかへて、この昔やの里の古歌としたるは、例の作者のたくみなるなり○一首のこゝろは、あし屋のなだのまほやく縁が、いとまなみ下、とらまされて、つげの小櫛もさす、容貌をつくることだにせず、世をわたるとなり

とよみけるは、この里をよみけるなりけり。こゝをなん、あじやのなだとはいひける。

(語釋) むかしの歌にといふより、この詞までは、皆、記者のことばなり  
此の男、なまみやづかへしければ、それをたよりにて、衛府のすけども、あつまり

きにけり。この男のこのかみも、衛府のかみなりけり。

(語釋) なまは、前になまみとある處にいへるが如く、すべて、其の事に精熟せざるをいふ、生業兼生兵法などのなまと同し。こゝは、散位、または、權官などにて、知行所にゆきて、遊びなどしてをるをいふなるべし○うれをたよりに云々、衛府の佐ともの來たれるを見れば、業平朝臣の右兵衛權佐なりし時を、暗にいへるなるべし。衛府の佐とは、左右衛門、左右兵衛の佐などの人々をいふ○このかみは、兄をいふ。これも、暗に、行平卿をさせるなり。衛府のかみとあれば、行平卿の左兵衛督などにてありし時をいへるなり。此の兄弟の任官、年代のたがひあるを、かく同時のやうに書きまさらしたるは、例のことなり

其の家のまへのうみのほとりな、あろびありきて、いさ此の山のかみれありといふ、ぬの引の瀧見れのぼらんといひて、のぼりて見るに、

(語釋) いさは、人を誘ふ詞なり○ぬの引の瀧は、布引瀧にて、あじやの里と同郡なる、山中にあり生田川の水となり。海邊より見れば、まことに、布を引きかけたる如く、二段にあつる瀧なり。ゆゑにこの名めりといふ

其の瀧ものよりことなり。たかさ、二十丈、ひろさ、五丈ばかりなるいこのおもてに、まらきぬたはをつゝめらんやうになん、ありける。

(語釋) ものよりことなりとは、他のなみくの瀧に異れりとの意なり○5このおもてに云々、石の面なり。この下下、「ななれあつ、其のなま」といふ詞を加へて見るべしと、新釋下に入らるが如し



○つづめらんとは、包みたらんの義なり  
さる瀧のかみに、わらふだのれほきごとて、さし出でたる石あり。其の石のうへに、はしりかゝる水は、せうかうじ、くりの大さにて、こぼれれつ。そこなる人れみな、瀧のうたよます。かのゑふのかみまづよむ。

(語釋) さるは、さあるの聲言なり○わらふだは、和名抄に、圓坐を調めり、後の世の圓坐といふものも、これに同じ○せうかうじは、小柑子なり。三代實錄に、太宰府例買小柑子云々など見えて、今の世の金柑なるべし。又、大かうじといふは、今の密柑のことなるべし○ゑふのかみは、行平卿をよめること、前の文にて知るべし。

わが世をばけふかあすかどまづかひの

なみだの玉とらづれまざれり

(語釋) まづかひは、待つ間の意なり○一首の意は、年老いたる、我が命の、今日か明日かと待つ間の、何となく、心ぼそく、落つる涙の玉と、今見る瀧の水玉と、其の數のおほきこと、らづれまざらんとなり

あるじ、つぎによむ

(語釋) あるじは、業平朝臣なり

ぬきみだる人こそあるらじしら玉の

まなくもちるが袖のせばきに

(語釋) ぬきみだるは、貫き亂るなり。瀧の白玉をまことの白玉に見なして、よめるなり○一首の意は、瀧の上にて、緒に貫きたる、あまたの玉とをきみだして、散らす人あるらうな、白玉のみまなくも散りかゝる事かな、我が身、いやしく、袖せばくて、多くはつゝみあへぬにとなり

とよめりければ、かたへの人わらふことじやありけん。此のうたをよみて、やみけり。

(語釋) かたへの人とは、あるじの外の人にて、側にありし人々をいふ○わらふことじやありけん云々は、よき歌の中に、わろきを出だしたれば、わらひとなりて、興さめたるにやありけん、人は、歌よますとなりけりとなり

かへりくる道とほくて、うせじし宮内卿もちよしが家の前すぐるに、日くれぬ。

(語釋) かへりくる道とほくて云々、布引の瀧のほとりより、葦屋の里へは、三里ほどあればかゝる○宮内卿もちよしは、いかなる人にか、知るによしなし

やどりのかたを見やれば、あまのいさり火、おほく見ゆるに、彼のあるじの男よむ

(語釋) いさり火は、漁に用ふる炬火をいふ

はるゝ夜の星か川べのほたるかも

わがすむかたのあまのたく火か

(語釋) 新釋に、いはく、いさり火を、遠く見れば、びに星か、螢かど見まがふけしきあり。晴るゝ夜



ともしもさへ入るは、すこしてても、くもりたる夜は、星の數おほく見えねばなり。川への螢とは、螢は川邊におほきものなればなり、一首のこゝろは、やどりのかたを見れば、きらくするもの、かすく見ゆるは、晴夜の空の星か川べにすたく螢か、あの見ゆる光は、マアと、奇異なるを歎息してれもへば、これはわがすむかたの螢のたく火ならんかといへるなり。かく解きたるは、第三句の螢かともさへ入るにふれり。此のやすめ詞のさくそへたるは、歎息の意あれば、かならず、あのが説の如くなるべし云々といへるぞよき

とよみて、家にかへりきぬ。其の夜、南の風ふきて、なごりの波、いとたかし。つとめて、其の家のめのこともらいで、うきみるの浪によせられたるひろひて、さへうちにもてきぬ。

(語釋) 家にかへりきぬは、あしやの里の家になり○南の風ふきて云々、この南面は海なれば南風ふけば、濱邊に浪たかくよせ来るなるべし。其の夜、烈風なりしかば、其のなごりの波、夜あけても、いと高きなり○つとめては、其の翌朝はやくの意なること、前にいへるが如し○めのこは、女の子にて、すべて婦人をいふ事なるべけれど、こは、家にめしつかあ女を見えたり○みるは、海松なり浪にゆられて、浮きて、濱邊下より来るをいふ。さてかく女どもの海松をひるひくるは、客人にまわらせんとてなるべし

女がたより、其のみるをたかつきにありて、かしはをほひて、出だしたり。うのかしはにかくかけり

(語釋) つきは、坏なり、坏は、すべて、食物をいふ器をいふ。其の中に、たけ高きを、高坏とはさなり○かしはをほひて云々、柏の葉は、木葉の中にも、は、廣くて、おほふたより上げればなるべし。上代には、かしはに食物を、たよとに盛ることありき。膳部を、カシハヤとよむは、其の證ともさへきか

わたつみのかざしたとすといはふも

君がためにはをさしめざりけり

(語釋) わたつみは、海神をいふ○かざしは、挿頭なり。人は、花、紅葉などをかざしすなれど、海神は、藻をかざしにさへんとなり○とすといは、とすといふの意なり○はははは、さつくとさ意に同じく、大切にすることをいふ○一首の意は、海の神のかざしにさすといふと、大切にしたまふ藻も、君がたのため惜しませ、風にて濱邊へよせられたれば、取りてまわらすなりとなり

おなかな人の歌にては、あまれりや。たらずや

(語釋) あまれりや、たらずやは、あまれりの方おもく、たらずやは、たよ、添へたる詞なり。前の「よしやあしや」とあるに同じ。参照して、其の意を知るべし。この歌、田舎人の歌としては、あまれりといふていふなり

(八十七)むかしのはとわかきにはあらぬ、これかれ、友だちどもあつまりて、月を見て、それがなかに、ひとり

(語釋) いとわかきにはあらぬ云々、いとわかきも物語書下さへるは、十二三歳より、二十歳以下



の人をいふなり。こゝは、わかきにはあらぬれば、二十歳以上なること、いふも更なり。諸抄に、四十歳位の事ならんども、又は、四十歳以上の事ならんどもいへり。これ、つぎの歌は、月に對して老を感じたる歌なればなり。されど、新釋には、いよわかきにはあらぬを、これを更下とされるは、二十より、三十までの年なるべし。三十位になれば、随分ものゝめはれを感じて、かゝる歌よまんも、似つかはしからぬわざにはあらすといへり。いづれにてもあるべし。さて古今集には、題しらすとあるを、かく詞をうへたるなり。歌は、まがふべくもあらぬ、業平朝臣のうたなり

おほかたは月をもめでしてこれぞこの

つもれば人のおいとなるもの

(語釋) おほかたは、凡そいふに同じ○めでしは、愛せずの意なり○これぞこのは、今言に、コレガアノなにかゝじやといふに同じ。古言に、彼のといふべきを、このといふこと多し○此の歌のこゝろは、大抵の事ならば、おもしるき月をも、さかくはめてし、これが、彼のつもりつもれば、人の老となる、年月の月なるものをとなり、さて此の歌、上の句は、天の月の事をいひ、下には、年月の月に轉じたるなり。巧なること想ふべし

(八十八)むかし、いやしからぬ男、われよりは、まさりたる人をれもひかけて、年へけり

(語釋) いやしからぬは、身分のかるからぬをいふ。身の輕からぬ人は、容易に口にもいひ出だしかぬべきに、まして我よりまさりたる身分の人を慕ふなれば、いひいで、承知せられぬ時は、いよ

く、外聞わるきわざなれば、つゝみは、かりて、年を経にけるなり

人しれすわれこひしなばあぢきなく

いづれの神になき名おふせん

(語釋) 人しれすは、口に出ださねば、思ふ人のしらぬをいふ○あぢきなくは、もと、味氣なくして、今言に、ウマクナイ、又、グアイワロシなをいふ語なり。それよりうつりて、無益、また、いたづらなどの意となれり。こゝも、うつれる方にて、意きこゆ○一首のこゝろは、思ふこゝろを人に知られず、いたづらに戀ひ死なば、人は神のたゞりにて、死にきといふべし。さては、神になき名おふせる道理なるが、其の無名のつみを負せまつらん神は、いづれの神にかあらんとなり。諸説くをくしきが多し。新釋の説よるし

(八十九)むかし、男、つれなき人を、いかでとおもひこひわたりければ、あはれとやおもひけん。

(語釋) つれなき人を、いかでとおもひ云々、男、わが方にたやすく離かぬ女を、さうして、手に入れんと思ひて、年比、戀ひわたりきとなり。女も、はじめは、かくつれなかりしが、男の年比熱心なるにほだされて、あはれと思ひけんとなり

さらば、あすものこして、ものばかりをいはんといへりけるを、かきりなく、うれしく、又うたがはしかりければ、おもしうかりける、櫻につけて

(語釋) さらばあす云々、前にいへるが如く、女も男の情のあつきにほだされて、然らば、あすあは



んていひしなり○ものごとにて、ものいふとは、塵、または、あすまなを隔て、話するをいふ○かぎりなくうれしくおもふは、男がなり○おもしるかりける櫻とは、花のさかりなる櫻をいふ。かくなりなる花を折れるは、程なく散るものなれば、歌下、今日こころかくはといはんためなり。用意こそやかなりといふべし

こころ花けふこころかくはにほふとも

あなたのみがたあすのよのこと

(語釋) あなたは、あといふに同じく、歎息の詞なり○一首の意は、おほかた聞てあたる如く、櫻花今日こころかくはかりに句ふとも、嗚呼、たのみがたけれ。明日は散るかもはかりがたし。君もこの花の如く、今日こころかくのたまへれと、明日の夜のことは、たのみがたしといへるなり

とらふ心ばへもあるべし

(語釋) この解、舊説わろし、新釋下はく、戀の歌は、あなたを心あきらまされいふが、つねの事なれど、とばかり、つれなき人の、にはかたなひくまされいふることなれば、男のうたかひて、あなたのみがた、あすの夜の事と云ふ心ばへも、實にあらざるべしと、記者のいへる詞なり云々

(九十)むかじ月日のゆくをさへなげく男、やよひのつごもり

(語釋) さへは、物の一つある上に、また加はるやうの處に用ふる詞なり。そのうへなぞの義なり。こゝも思ふ人に逢ふ事の出来ぬのみか、月日のいたづらに、經ゆく歎ある意を、含めたるなり○やよひのつごもりは、三月下旬の義なること、前にいへるが如し

をしめども春のかきりのけふの日の

夕ぐれにさへなりけるかな

(語釋) さてこの歌は、後撰集に、題しらす、よみ人しらすとありて、第三句を「けふもまた」に作り。後撰集にては、たゞ、春のつくるを惜む歌なるを、こゝには、詞を加へて、思ふ人に逢はぬ、いとづら下、過ぎゆく月日を惜しむ、今日は、春のわかれもうすすへて、いとや、をしくかなしき心とせり。作者の巧みなること、驚くに堪へたり

きしる人もなじや

(語釋) 右の歌、たもてには、春を惜しむ意をあらはし、うらには、思ふ人に逢はぬ、月日の經ゆくをうらむるなるが、此の歌のこゝろを、聞き知る人もなじやとなり。これ記者の詞なり

(九十一)むかじをさこ、こひごとなきつゝかへれど、女にせううこそをだに、はせ

でよめる

(語釋) きつゝかへれとは、戀ひしむた、度々、女の居る近邊までは、來たれども、逢はぬかへれとの義なり○せううとは、消息にて、文にて音信することをもいふ、こゝは、戀想詞をいひかくるをいふ、戀想詞をいひかくるをも、せううことといふこと、前下添へていへるが如し

あしべこくたふしをふねらくうたび

ゆきかへるらんしる人なじに

(語釋) あしべこくは、背邊漕くなり○たななしをふねは、櫓なし小舟にて、船櫓の無き、小舟



をいふ〇いふたひは、幾千度なり〇あまた、ひ来たれど、女にこそとりもたせられぬと、若のしげみを行きかへる、小舟の見えぬにたとへたるなり〇こは、古今集による人しらす、堀江こゝ堀なし小舟こぎかへり、同じ人にやこひわたるべきとあるをなほして、例の作者のつくれるものなるべし。又、堀なし小舟といふことは、萬葉などにもよめり

(九十二)むかし、男、身はいやしくて、いとたかき人をおもひかけたりけり。すこしもたのみぬべきさまにあらすやありけん。ふじておもひ、おきておもひ、思ひわびてよめる

(語釋) 身はいやしくて云々は、身の官位なきをひくして、勢力なき身なるに、すくれて官位の高き人を懸想したるなり〇すこしもたのみぬべきさまにあらすやありけんは、記者の詞なり。男はいとく戀ひしたへど、少しも、願ひをすべき様子見えすして、女はつれなきよしなり〇ふじておもひ、おきて思ひは、其の思、切下して、身も懸懸するまをこがるよしなり

れふなく、おもひはすべしなう、なく

高きや、さきくるとかりけり

(語釋) かななくは、随分の義にて、我が身の分下したか意〇なう、なくは、比類なくの意にて、比類せざるなり〇一首のこゝろは、身の分下應じたる戀こそすべけれ、賤しき身にて、比類せざる、いはゆる世にいふ、灯籠につりおねといふ如き、不相應の戀は、すまじき事よ、かく成りかたくて、くるべきものよしなり。成らぬてひたわびて、後たせられるよしなり。此の歌の解は、古意の

職、まことによろし

むかしも、かゝることありけり。世のことわりなやありけん

(語釋) むかしもかゝることありけりは、今人も、戀に貴賤の區別なく、かゝる事、世におほし。やはり昔の人に、かやうなることありきとなり〇世のことわりなやありけんは、戀のためには、かく苦勞するも、古今、共にまゝあるならひなるは、これ人情の道理にやあらんとなり

(九十三)むかし、男、女ありけり。いかゞありけん。其の男、すますなりにけり。のちに、男ありけれど、子ある中なりければ、こまかにころあらねど、時々、ものいひたこせけり。

(語釋) すますなりにけりとは、男が女の許へ通はぬやうになれるをいふ。すまは、住むにて、男女、共に居ることといふ〇のちに男ありければ、はじめの男にはあらで、異男なり〇子ある中なりければ、はじめの男とは、子まで生みたる間なれば、むかし、相住みし時にくらべて、こまやかに語り合はねど、しかしなから、舊情もだしがたくて、時々、ものいひやりきとなり

女のかたに、ゑかく人なりければ、扇にかきにやれりけるを、今の男のものすとて、ひと日、ふつか、おこせざりせり。

(語釋) 此の處の文きこえにくし。但、新釋に、女のかたに、句を切りて、此のたのてはは。扇に云々へかゝれり。此の女、繪かく人なりければ、女のかたに、扇にかきにやれる必なり。ものすまは、来て居ることを、大やうにいへる詞なりといへり。しばらく、此の説に従ふべし〇大和物語に、



染殿の内侍といふ、いままかりけり。それを、よしありのおとと申しけるなん、時々すみたまひける、物をよくしたまひければ、御衣をもをなんあつげさせたまひけるに云々、又、いはく、在五中將すますなりてのち、中將のもとより、きぬをななれさせたりける。これにあらはひ洗ひを施へたる詞(なごする人なくて、いとわひしくなると、いひやりけるを、猶、必して給へとなんありければ云々)とあるは、この文をかきかへたるものなるべし。元來、大和物語は、伊勢物語を書きかへたる處おほし。其の中に、人の名を明らかにかけるは、さるいひつたへありし故にもあるべく、又は、推量してあてたるにもあるべし、されば、必、證をしがたきことを更に論なし

かの男、いとつらくて、おのがきこゆる事をば、今までしてたまはねば、ことわりと思へど、猶、人をばうらみつへきものになんありけるとて、よみてやれりける。時は、秋になんありける

(語釋) いとつらくて、甚、つらく思ひての意なり○おのがきこゆる事をば云々、これよりなんありけるまでは、男の詞なり、きこゆることは、こゝにては、頼む事といふほどの意なり。おのれ、今は住まずなりて、異男の來て居る事ゆゑ、己が頼みたる、肩の給をすみやかたかゝぬは、道理なりと思へど、猶、うらめしくおぼゆとなり○時は、秋になんありけるは、記者の詞にて、つぎの歌下、今の男を秋に、我が身をさきに春にたとへたれば、それを釋したるなり

秋の夜は春日むするゝものなれば

霞に霧やたちまらるらん

(語釋) この歌の一首の意は、秋の夜には、過ぎにし春日の事をわするゝが、人情のつねなり。其の故は、春の霞よりも、秋の霧がたちまらりて、よきゆゑならんとなり。さて裏には、我を捨てて、今の男に思ひつき給ふは、我にまらりて、今の男の、容觀の美しきがゆゑなるべしとなり。己を春と、霞とに見たて、異男を秋と霧とに見たてたるなり。さて霞より霧のかた、たちまらるらんといひて、想ひる意を含めたるなり

となんよめりける。女かへし

千々の秋ひとつの春にむかはめや

もみちも花も共にこそちれ

(語釋) むかはめやは、むかはんやは、むかひはせじの意なり○一首の意は、千々の秋も、一つの春もにむかひはせじ。いたく劣れり。されど、秋の紅葉も、春の花も、共に散りやすきものにて、頼みかたしとなり。秋の紅葉を、今の男に、春の花を、はじめの男にたとへたるは、いままさまじ。贈答どもにたくみなりといふべきなり

(九十四)むかし、二條の后につかうまつる男ありけり。女のつかうまつりけるを、常に見かして、よばひわたりけり、いかでものごしにだに、たいめんして、おぼつかなく思ひつめたる事、すこしはるかさんといひければ、女、いとこのびて、ものごしにあひにけり。ものがたりなごして、男

(語釋) 常に見かして云々は、男も女も、二條の后に仕うまつりたれば、常に、互に見たるよしなり



り。○よばひは、呼ぶを延べたる言なり。こゝは、男の女を慕ふことに用ひたり。なほ、この詞、くはし  
くは、竹取物語講義に「よばひ」○いかた物としにだに云々は、何ぞ予して、たどひ、障子あすまを隔  
てども、逢ひたしと、切に思ふさまなり。かくいふは、女のつれなくして、容易に逢ひかたきよしな  
り。たいめんは、對面なり。○おぼつかなく云々は、我に離るか否か、不安心におもひつめたるさまな  
り。おぼつかなしの語釋は、前に「へり」○はるかさんは、晴るかさんにて、今言に、ハヲサンといふ  
に同じ。始終、女の心を不安心に思ひつめたるを、逢ひて、いさゝかにても、はらさんとなり。○し  
びては、人しれず、かくれてなし。

ひこぼしてこひはまされりあまの川

へだつる關を今はやめてよ

(語釋) ひこぼしは、彦星にて、牽牛をいふ。我が戀は。その彦星にもまされりとなり。彦星は、年  
に、一度、織女に逢ふといへど、我はたましくあそ夜も、かく物としてへだてれば、彦星の織女  
を慕ふよりも、我が戀は、まされりとなり。○あまの川は、牽牛、織女の事をいへば、其の語の縁と、  
下のへだつといふ語の冠辭とにかけらなり。○關は、今、物として逢ふをいふとも見ゆれど、なほ、基  
まで打ちとけすして、月日へたるをたどひたるなるべし。さてつれなかりし間は、止むを得られど、  
かくしのびて、逢ふをならば、此の隔つる關を、今はやめてよといふ意なり。一首のこゝろは、たの  
づから、聞ておたるが如し。

この歌にめでと、あひにけり

(語釋) 此の歌は、まことと切なるおもひをあらはしたるなれば、うれし感じて、女のおもひをけて、  
逢ひにけりとなり。

(九十五)むかし、男ありけり。女をとかくいふこと、月日へにけり。いは木にしあ  
らねば、心ぐるしとやおもひけん。やうく、あはれ思ひけり。

(語釋) いは木にしあれば云々、この女も、岩や木の如く、無情なるものであらねば、よすがに、  
の毒をと思ひけん、漸々に、あはれと思ひきとなり。心ぐるしとは、今言に、氣の毒をいふに同じ。  
古意に、苦に思ふを解せられたるは、いかゞ

その比、六月のもちばかりなり。女、身にかさひとつ、ふたつ出でたりければ、い  
ひおこせたる、今は何の心もなし。身にかさもひとつふたつ出できけり。時  
もいとあつし。すこし、秋風吹きたちなん時、かならず、あはんと入りけり。

(語釋) もちは、望の字をまつ。ふれど、必しも、十五日か、十六日の事はあらで、今、今月中旬の  
の意に見るべし。○かさは、瘡にて、腫物の類をすべし。こゝは、今、いさゝか、ねふとせよといふもの、  
出でたるなるべし。○今は、何の心も云々より、かならずあはんと「まては、女のいひおこせたる詞な  
り。是よりなきは、故ありて、つれなくしつれど、今は君の情をあはれと知りぬれば、何の思ふ子細  
もなし。唯、たまたま、身に瘡も一つ二つ出で、殊に時、六月中旬にて、盛夏の折なれば、少し秋風  
たちて、清涼なる時折に、逢はんとなり。

秋たつころほひ、女のち、其の人のもとにいくへかなる事きして、いひのこ



り、くせちいできけり。

(語釋) この文、いたく、省略せるがゆゑに、解しにくし。但、新釋に、この人のもとにいくとは、女のみかへられて、男のもとにいくことなり。昔は、女の家、男のかよひてすむ事なるに、女をひかへんとするは、父に知られじと、ふかくしのふゆゑありて、女をひかへたりかくさんど、かまへたるなるべし。さるからに、父、その事をきつつけて、はら立ちいひのゝしるなり。くせちは、中昔の俗語にて、今の世に、やかましき事いできたりといふが如し。さて此の段、女は、母のもとにをり、兄は父のもとにをりて、家の異なるなり。さ必得て見るべし。其の上しを、くはしからぬは、中むかしは、大かたかやうの事なればなりといへり

さりければ、此の女のせうとにばかり、むかへに來たりければ、女、かへでののはつもみちをひろはせて、歌をよみて、かきたく

(語釋) さりければ、サブリケレはにて、前を承けていふ語なり○せうとは、兄人の音便にて、兄のことなり○にはかに云々は、此の女を、母のもとにおきては、いかなる事の出でこんも計りかたければ、兄がむかへて、父のもとにおかんとするよしなり○はつもみちは、初紅葉なり。七八月の頃にまされには、色づきて、おつる木の葉もあるものなれば、それを拾はせたるなり。かくせるは、木の葉ふりしく云々といはんためなり

秋かけていひしながらもあらなくに

木の葉ふりしくえにこそありけれ

(語釋) 此の歌、必得がたし。古意には、歌の意は、梨りし事も、かくあらぬるまで成りゆくは、まこととに、淺き縁にて、有りけりととなり。さて既に、秋風吹き立ちなん時に、あはんと梨りしをいへば、其の時も過ぎて、木の葉の散りしくといひて、月日のうつり來しを、詞のつゞけていひせ、かつ、木の葉のちりつる水は、淺くなるものなるをもて、あさき縁に江をうへて、たごへたり。かくむつかしきは、例の記者の歌なりといへり。又、新釋に、此の歌の解、拾穂、古意をもとあるそかなり。さては、あらなくにといふ詞にかなはず、臆斷も、をきかま、たろろかなるうへに、くたくして、一首の意、きてえず云々。この一首のころ、みな月の比より、秋風吹きたちなん時、かならずあひまわらせん、とかくせんなど、秋かけていひしをほりにもあらず、いひしことは、むなしくなりぬるに、いたづらに、其の秋のみは來て、木の葉ちる時節になれり。さてくあさきはかなき縁なりきと、散れる木の葉につけて、いへるなり。さて木の葉ふりしく江は、水あさくなるものなれば、淺き事のためにも、かねいひて、江に縁をかねたり、とき得がたき歌なり。よくく、心とめて、見るべし云々といへり。まづは、新釋の說によるべきか

とかきおきて、かしてより人おこせば、これをやれとて、らぬ。さてのち、つひに、よくてやあるらん、あしくてやあるらん、いにし所も志らず。

(語釋) かしてより、人おこせば云々は、彼の男の許より、人よこしたらば、之をやれと、召しつかひの女などに、紅葉にかきたる歌をわたしかきて、父の許へゆきたるなり○さてのちは、サウシテ後の義なり○よくてやあるらん、あしくてやあるらんは、男が女の身のうへをおもひこころをいふ



なり○いにし所をしらすは、行方も知られぬよしなり

かの男は、天のさか手をうちてなんのろひをるなる。

(語釋) 天のさか手をうちてなん云々、天のとは、いにしへの常にて、天より傳へたる事をはじめとし、物の稱美にも、奇妙なる義にも、冠らせいふ辭なり、さか手は、古事には、手を我が前の方にて打ち、凶事には、後方に手をめぐらして、打つなり。古事記上卷、事代主神、この國を天孫に避けて、海に入りたまふ時の文に、即踏傾其船。而天逆手矣、於青柴垣打成而隱也と見えたるは、逆手を拍ちて、船を青柴垣アヲサキになしたまへるにて、今の世にいふ、まじなひなるを、こゝは、呪詛するわざにいへるなり。よりておもへば、上古には、逆手をうつは、たゞ、禁厭のわざなりしを、中昔には、呪詛する事に用ひたりきとも見えたり

むくつけき事、人ののろひひごとは、れふものじやあらん、れはぬものじやあらん、今こそは見めどぞいふなる

(語釋) ひくつけきは、恐ろし、又、氣味がワロイなどの意なり。こゝは、すべて、記者の詞なり。男の呪詛するを恐ろしき事かな、呪詛といふ事は、ろの呪詛せらるる身に負ふものじやあらん、おもはぬものじやあらん、それは知らねど、此の男は、今におもひしらせんとて、逆手を拍ちて、のろひをるなりとなり○むくつけといふ詞を、舊説に、報いかましき、又、ひごきといふ詞なりなど、とかれたるは、更にあたらず

(九十六)むかし堀河のおほいさうちきみと申す、いままさかりけり。四十の賀、九

條の家にてせられける日、中將なりけるおきな。

(語釋) 堀河のおほいさうちきみ云々、おほいさうちきみとは、太政大臣をいふ。これは、基經公、すなはち、昭宣公のことなり。公は、貞觀十四年八月に、三十七にて、右大臣の左大將となりたまひ、四十は、同十八年なり。此の時、まだ、業平朝臣は、中將ならず、翁ともいふべからぬほどなるを、かくいふは例の此の文の書きざまなり。されど、歌は、古今集にありて、此の朝臣のなること、論なし○四十の賀云々、四十歳を初老といひて、祝ふことは、懷風藻に、正六位上刀利宣令時五首賀五八年、從五位上總守伊岐連古麻呂一首五言賀五八年宴云々と見えたり。されば、古代よりの習慣なり。皆、藤原の朝より、奈良の朝のはじめまでの人々なればなり○九條の家も、基經公の家なるべし

さくら花ちりかひくもれ老いらく

こんどいふなる道まがふがに

(語釋) ちりかひは、散りちがふ意なり。老いらくとは、唯、老といふ事に用ふ○がにには、爲にの義なり○一首のこゝろは、櫻花よ、あまたちりちがひて、うこらくらくせよ、老といふもの、來ん道まがふためにとなり○老をば、人の如くよみなしたるが、例のささなくておもしるきなり。古人の歌には、かゝるをさなきが多き事、前にも屢し入

(九十七)むかし、おほきいれほいさうちきみときてゆるおはこけり。

(語釋) 此の文は、文徳、聖和の御時のさまに書きたれば、其のほどの太政大臣は、藤原の良房公なり。公は、忠仁公を諡し、清和天皇御外祖父、天安元年二月に、太政大臣となり、同、四年、從一位に叙



せられた、二年十二月、攝政となり、貞觀十四年九月に薨せられき。堀河の太政大臣と申せるこれなり。こゝは、必しも、忠仁公と定むまじけれと、暗に公の事をおもひて、かけること、更に論なかるべし。

つかうまじる男なが月ばかりに、梅のつくり枝に、雉をつけて奉るとて  
(語釋) なか月ばかり云々、古意に、長月としもかけるは、夏より八月まで、雉を賞せず、又、冬春は、まことの梅花あれば、作枝は用ふべからず。かれこれ思ひて、長月をよきほとて、いへるなるべし。之を以て思ふに、梅が枝に、雉をつくるも、花のある時は、其のまじつべきなり。花をこきおろして、つくるが故實なりといふは、故實を守るが如くして、古意にはあらずと入り

我がたのみ君がためにとをる花は

ときしもわかぬものこそありける

(語釋) この歌は、古今集にも、六帖にも、初の句は「かぎりなき」とありて、題しらす、よみ入らずとあり。されば、時ならぬ、かへりなきの花など折りて、朝廷に奉りし時の歌なるべし。されど、こゝには、はしがきて、梅の作枝とし、雉をつけたりと書きて、ときしもの詞下、まじをかくせりといふくりにしたるなり。○一首のこゝろは、我が頼みにする、君のために折る花は、我が心のいつまかはらぬにならひて、其の花も、時をわかつ、つねに、咲きてあるものこそありけるといふ意なり。かくいふか詞をかへて、意を異にせるは、この作者の例の事なり

まへりけり

(語釋) かしこがりは、賢きとなりなしたりと、ほめたる詞なり。○をかしがりとほ、今言に、たましゐがりといはんが如し。すぐれて、風流なりとめでたまふなり。○ふくは、願にて、今の月俵、年俵をいへんと、うづりては、今の世の褒美などの義にせり。こゝも、まじかり。なほ、くはしくは、前に入り。さてこゝは、記者の、みづから作りて、且、ほむるは、例のとりにしなり

(九十八) むかし、右近の馬場のひをりの日、

(語釋) 新釋にいはく、此の右近の馬場のひをりの日といふ事は、願昭の説にて、やすく聞ておたるを、世に難義なりといひ傳ふるなり。世々の物しり人たち、とやかくやと思ひめぐらし、いろくにまきらはしくいひなしつつ、今はまことと、難義とかなれりける。ふのれ、願昭のために、其のきたるぬれ衣をとりすてんとす。まづ願昭の袖中抄に、右近の馬場は、一條より大宮の方をいふ。それより東の方は、左近の馬場なり。五月三日、左近の荒手詰、四日右近の荒手詰、五日左近の眞手詰、六日右近の眞手詰にして、此の眞手詰の日、すなはち、ひをりの日なりといへるは、よくあたれることなり。なるを、岡部の翁、又、本居翁などは、此の日の競馬、騎射は、此の馬場にてはなきを、願昭のしらすいへるなりとて、馬寮式、騎射式、左右近衛式の文をもひき出で、五月五日、六日の競馬騎射は、大内の馬場にて行はれて、帝、武徳殿にみゆきし給ひて、見たまふ事を、くはしくははれたり。されど、この説は、いまだしき事なり。そのゆゑは、五月五日、六日に、大内の馬場にて、ある競馬騎射は、帝のみゆきありて見たまふほどの事にて、延喜式にしろされ、左右近衛の馬場にてあるは、其



のうちならしめ給ふ、式には、さばらうとしむればなるなり。荒手番、眞手番と云ふ名をもちあへし。乗手、射手とつかひこゝろむる心にて、俗語に、あらうと云ふ、本こゝろむと云ふが如し。北山抄に、正月十五日、兵部手結、十七日觀射、十八日賭射とあるにてもしるべし。兵部の手結は、賭射のうちならしめて、同じ心ばへなり云々、さて五月三日、四日は、あらうと云ふなり。五日、六日は、其當日にて、大内の馬場にまゐらぬさきに、左右近衛の馬場にて、本こゝろむをする事なれば、眞手番とは云ふなり云々、此の眞手番は、朝はやくありけん、歌に、「あやなくけふやなかめくらさん」と云へるも、あしたによめるにてこそ、よくかなへれ。大馬の馬場なるは、みだりに、人の見にゆく事かなはねば、此の本こゝろむを見んとて、物見事も出づる事なりけり。今昔物語には、今はひかし、右近の馬場に、五月六日、弓行ひけるに、在原業平といふ人、中將にてありければ、大臣屋につきたうけるに、女車、大臣屋ちかく立ちてと云へり。(かく右近の馬場に、五月六日、弓行ひけるに、今昔物語にさだくと見えたるを、岡部翁、本居大人など考へもらして、物に見えぬよしにはいはれたるなり)かれば、右近の馬場にて、五月六日に、騎射ある事さたかにして、五日には、左近の馬場にてあるべき事、もとよりなり。されば、岡部翁の説も、本居大人のいはれたる事も、皆あやまりにやありける。さて左近の荒手結のものに見えたるは、西宮記曰、是日、左府荒手結、恒例三日行之、而依大内御願殿上佐籠御物忌、因彼日不行云々とあり。かゝれば、三日は、左近の荒手結にして、四日は、右近の荒手結なることも知られたり。かく荒手結といふ事あれば、眞手結もあるべき事、論なし云々。五日、六日の眞手結は、かみにひき出でたる、今昔物語神中抄を證とすべし。さて又ひき取りといふ事は、古

意には、引柵、又は柵欄ならんといはれたれど、うけがたし云々、これも、袖中抄に、眞手番の日は、射手の近衛舍人、榻の尻をまへさまに引きたをりて、まへにはさむゆゑ下りさへ入るやよんしかりける。云々、かなるよしにて、ものゝ名となること、さして入のさまなり。近衛舍人着榻事、西宮記、十七の巻、賀茂祭警固の條にも、近衛舍人着榻半臂等、候陳と見えたり。眞手番の日は、やがて、大内の馬場にまゐる事なれば、榻を着するなるべし云々と見えたり。この説にて、聞こえたりむかひにたてたりける車に、女のかほのしたすだれより、ほのかに見えければ、中將なりけり、男のよみてやりける

(語釋) ひかひに云々は、此の男の、物見る馬場の坪を隔て、ひかひの方に、女車は立てたるなり。○かほは、顔なり。あるくは、かほといひて、總身の事にもいへど、こゝは、單に顔を見てよろし〇したすだれは、西宮記、十七の巻に、婦人之車傍なりとあり。車傍といふとは、異なり。下すだれは、車傍の下の方にそへて、かくるものなり。○中將云々、或る説に、中少將は、馬場のれど、屋に着くべければ、女車など入る處は、遠くて見えす、又、歌よみてやるべくもあらずなどいへど、此の文は、例の書きかへたるなれば、實を以て論すまじきなり。古今集、戀に、右近の馬場のひをりの日、向ひて立ちたりける車の、下すだれより、女の貌のほのかに見えければ、よみてつかはしける、業平朝臣とありて、つぎの歌を載せたり

見ずもあらずみもせぬ人のこひしきは  
あやなくけふやながめくらさん



(語釋) あやなくは、理なくして漫の字なきをまつ。今言下、わけもなくならんが如し○なごめは、物にもひながら見るをいふ。たゞ、眺望の義に用ふるは、あたらす○一首のこころは、きはやかに見たるにもあらず、又、見ぬにもあらぬ、人の心にかゝりて、わけもなく、たゞ戀ひしくて、今日は物にもひくらさんとなり。さて其の人とさだかに知りたし、名のり給へといふ意を、餘韻にもたせたるなり。されば、返歌に、知るしらぬ云々とは、いへるなり

かへし  
志る志らぬ何かあやなくわきていはん

おもひのみこそしるべなりけれ

(語釋) 一首の意は、さやうに、其の人を知ると知らぬとを、異なる事にしたまふが、わけもなき事なり。たゞ、深く思ひ給へ、さし給はし、其の御がもひこそ、案内者となりて、あひたまふやうになれといふ意なりと、新釋にいへるにて、聞こえたり

のちはたれと知りけり

(九十九) むがし、男、後涼殿のはさまをわたりければ、

(語釋) はさまは、こゝは、殿と殿との間をいふ○後涼殿とは、清涼殿の後北にあるゆゑにいふ。されば、はさまは、後涼殿と、清涼殿との間なることしるし

あるやんごさなき人の御つぼねより、むすれ草を志のふ草をやいふとて、さし  
いださせたまへりければ、たまはりて、

(語釋) この處、語註さかゞ、新釋下は、やまも物語には、みやす所の御方よりとあり。げにさやうならんと思はるゝ事なり。されど、此の物語下には、ある貴女の御局を見るべし。その貴女と、此の男、もと相知れりしかども、かく禁中にまわり給ひて、時めき給ふ事なれば、中たえたるなり。さてこゝは、かく中たえて、消息もなきは、除れたるならん。されど、さはいはで、中たえたるは、おほやけをばかりて、しのぶゆゑにやあらんといふ心を、あらはたしはば、側の人をきゝ知りやせんとて、むすれ草をさし出だして、むすれたるならんといふ心を知らせ、又、しのぶゆゑをやいふらんといふ心を、此の草をしのぶ草をやいふと、草の名を問ふさまに、いひまぎらして、人のきゝ知らぬやうにと、したるわざなり。さるを、昔より、女の用意ありて、ものしたるよしを、考へえたる人なかりしかば、いづれの註も、みなときえざりき云々○むすれ草は、萬葉などにも、萱草と書きたるがおほし。和名抄にも萱草、一名、陰愛(和名和須禮久左)と記し、後撰にも、「おもふとはいふものからにともすれば、むすれ草の花にやあらぬ」、又、枕草子に、六月下、陰草の花さける事もかきたり。されば、今も萱草とて、愛の比、黄なる花の咲くものをいふ事、明らけし。しのぶ草は、和名抄、昔の類の中に、垣衣一名、鳥韭(和名之乃布久左)とありて、ことなる草なること明らかなる。大和物語には、れなし草を、しのぶやと、むすれ草をいへばと書れたるは、心得がたし。一章に、二名ありといふは、あやまりなり

むすれ草おふる野へと見見るらめ

こはしのぶなりのちもたのまん



(語釋) これまで中たえたれば、げに惚れたるならんと、見給ふらめど、さにはあらず、人目を忍みゆゑに、中絶せるなり。されば、又、逢ふ時あらんと、心にたのみてあり。ゆく末も、たのまんと意なり。それを、男も側の人に知られぬやうに、草によせて、まぎらはしたるさまなり。

(百)むかし、左兵衛督なりける、在原の行平といふ人ありけり。その人の家、よき酒ありとさきて、うへにありける人々のまんとて、來たりけり。

(語釋) 行平は、三代實錄に、貞觀六年三月、從四位上、備前權守。在原朝臣行平爲左兵衛督と見たり。良近朝臣は、貞觀十二年正月、右中辨となり、同十六年、左中辨には轉せれば、行平左兵衛督なる時は、良近は、左中辨にあらず。又、下にいふ太政大臣は、(忠仁公)同、十四年に薨じたまひて、良近また右中辨の時なり。かく事をかへたるは、例の事なり。○よき酒は、濁酒と清酒とある中に、清酒をいふなるべし。○うへにありける人々とは、殿上にありける人々なり。○人々のまんとて來たりけり、この詞は、もとなきを、本居翁の補はれたるなり。まことに、この詞なくては、文意きこえず。

左中辨藤原の良近といふ人をなん、まらうとさねにて、其の日は、あるじまうけしたりける。

(語釋) まらうとさねとは、客のうちの主となる人といふ。婿さね、使さねといふも、その主となる人といふなり。○あるじまうけは、響應するといふこと、前にもいへり。

なごけある人にて、かめに花をさせり。その花の中に、あやしき藤の花ありけり。

(語釋) なごけある人とは、風雅心ある人の義なり。これは主人の行平をいふ。○うの花の中にいふにて、種々の花ありしことを知らせたる文なり。注意すべし。

花のしなひ、三尺六寸ばかりなんありける。

(語釋) しなひは、花ぶさの長くさかりたるをいふなり。今の世の藤の花は、五尺、六尺ほどさがるもあれど、古はつくらすして、おのづから、咲きたれば、長さがまれにて、三尺六寸さがるなるは、珍らしかりしなるべし。

うれを題にて、歌よむ、よみはてがたに、あるじのはらからなる、あるじまうけしたまふと聞きて、來たりければ、とらへてよませける。

(語釋) はらからなる云々は、同胞なる男といふ意に見るべし。行平朝臣の同胞はほくて、たれともいひかたけれど、これも、業平朝臣をあてたるなるべし。さて業平朝臣は、歌にすぐれたる人なるを、歌の詞しらぬよしにかき、又、この歌のわるきなきを、皆、記者の狂言なり。○あるじまうけし給ふと聞きて來たるは、これも、賓客をもてなさんとて、來たれるなり。

もとより歌のことは、しらざりければ、すまひけれど、こひてよませければ、かくなん

(語釋) すまひは、争ひなり。こひは、辭退するをいふ。○かくなんは、下によみけるといふ詞を含めたるなり。

さく花のしたにかくる、人おほみ



ありじたまさる藤のかけかも

(語釋) おほみは、おほぶにの意なり○ありじたまさるは、いよ／＼榮えゆくをいふ○かまは、あ  
の歎息の意なり○つぎの詞を以て見れば、藤原の太政大臣の、先祖にこえて、榮えたまも、同じ氏  
族にて、長近朝臣の如き、よき人々の、其の下に多ければ、かくはあらんと、其の日の上客をばじめ  
て、其の席なる、藤原氏の人々ぞ、藤の花によそへてよめるなり

などかくしもよむといひければ、おほきおと／＼の、榮花のさかりにみまうかり  
て、藤氏の、ことごとさかゆるをおもひて、よめるとなんいひける。みな人、うしろ  
すなりけり

(語釋) などかくしもよむ云々は、此の席にある人の問の詞なり○いよ／＼かたりては、おほしきして  
いふ意なり○皆人云々は、此の歌をよみ出でたる時は、人皆、いかにかくはよむと、そしらす  
るのみなりしかぞ、かやう／＼のわけにて、藤氏の、ことごと、榮ゆるをよみたりと答へたりしかば、  
皆人、そしらすなりにきとなり

(百一)むかし男ありけり。うたは、よまさりけれど、世の中をれもひこりたりけ  
り。

(語釋) 世の中を思ひしりたりとは、世の中の人情を、よく知たりとなり。元來、歌は、物のあはれ  
を旨とするものなれば、歌よむ／＼の人は、すべての人情にも通じざるが、つねなれば、此の男は  
歌はよまねど、人情はあかくものゝあはれを知りきとなり。あるは、氏族なる女の、尼となりて、山

里にあるを、うらやめるよしの歌なきかくれるは、まことに、なまけなき事なればなり

あてなる女の尼たりて、世の中をおもひうむじて、京にもあらず、はるかなる  
山里にすみけるもどに、もどこどくなりければ、よみてやりける

(語釋) あては、上品の意なること、前にいへり○うむじては、今言に倦みはてしなく、  
しむくは、氏族の字音なり○元來、世をすてたる尼の許へ、男が歌をおくるなれば、尋常ならぬ  
は、殊に氏族なるよしをこわりたるなり。之を、もど逢へる中なりなど、説けるはわろし  
そむくとて雲にはのらぬものなれば

世のうき事をよそになるてふ

(語釋) うむくとては、世を背くとてなり○雲にはのらぬものなれば、仙人などのやうに、雲に  
乗りて、空中を飛び行くといふが如き、ことごとしきわざにはあらぬとなり○一首のこゝろは  
世を背くとて、雲に乗りて、飛びゆくものにはあらぬを、山里にうづりすめば、あつから、世の憂  
事やよそになるといふよしに、うけたまはれば、君にもあるこそあはすらんと、問かよしなり。とて餘  
韻に羨まし。我も世をいとへばといふ意を、含めたるなり

(百二)むかし、深草のみかどにつかうまつりける男ありけり。いとよめに、じ  
ちやうにて、あだなるこゝろなかりけり。

(語釋) 深草のみかどとは、仁明天皇の御事なり。此の帝崩じ給ひて、深草山に葬り奉られしかば、  
かく申すなり○よめは、眞實の意なること、既にいへり○じちやうは、實様の字音にて、やは、眞實



なるをいふ。かく重ねていふこと、此の比の書下は、例たほきことなり  
たるに、心あやまりやしたりけん。

(語釋) かく眞實忠直なる人が、親王たちのつかひ給ふ女に、ものいふは、あるまじき事なれば、心  
あやまりやしたりけんとは、いへるなり

みてたちの、つかひたまひける女を、あひしりけり。さて朝にいひやる

(語釋) みこは、親王をいふ。此の外は、聞てえたるが如し  
ねぬる夜のゆめをばかなみまごつめば

いやはかなくもなりまごるかな

(語釋) 昨夜逢ひしは、たゞ、夢の如く覺えて、はかなければ、せめて、又、さだかなる夢にだに見ん  
て、まごつめば、その夢をも見ず、いよ／＼、はかなくなりまごる事よとなり○此の歌は、古今集  
にては、業平朝臣のなるを、たれどもさすべからぬやうに探りなしたるは、例の事なり  
となんよみてやりける。さる歌のきたなげごと

(語釋) 歌のきたなげごととは、眞實なる人の、ぬしある女に逢ひし事なれば、思ひなほして、過を  
改むべきに、よはなくて、いよ／＼、切なる情をよみてたくりたれば、かくいふなり。自記の書なれ  
ば、卑下して、いへるなりといふ舊説は、いかゞ

(百三)むかし、ことなる事なくて、尾になりける人ありけり。かたちをやつした  
れど、ものやゆかしかりけん。賀茂の祭見に出でたりけるを、男、うたよみてやる

(語釋) ことなる事なくて云々、かしられたるして、尾となるなどは、大抵、子におくれたりとも、女  
は、父か、夫を失ひたるが如き、よのつねならぬ事ありて、世をはかなみてのしわざなるを、此の人  
は、さる格段なる事なくて、尾になれるよしなり。されば、親はやつして、尾となりたれど、世の中の  
事、ゆかしくて、賀茂の祭見にも行きたるなりけり  
世をうみのあまとし人を見るからに

めくばせよともおもほゆるかな

(語釋) うみの云々、世を倦みて、尾になれるは、海の磯にいひなして、雲はみるをかりとりて、人  
にくはすものなれば、海濱喰せに、目くばせをかねたるなり。目くばすとは、今の世にもいふ如く、  
おもふ情を、目にて知らするをいふなり。こゝは、尾なれども、物ゆかしくて、祭見に出でたるは、わ  
れに目くばせして、戀の情をよせよと思はるゝよしなりとの意なり

(百四)むかし、男、かくては死ぬべしといひやりたりければ、女、

(語釋) かくては死ぬべしとは、男が女に對して、かくつれなくては、こがれじ下、死ぬべしと、  
いひやりけるなり

まら露はけなばけななん消えずとも

玉にぬくべき人もあらじを

(語釋) これは、男は、いと切に戀ふるを、女の情なきを擧げて、一つの興とせるなり○一首の意  
は、よしや、消えなばきえよ、消えずありとも、玉をぬきて、めづる人はあらじものぞとなり。露を男



たたとへたるなり

とらへりければ、ねたしとおもひければ、こころなごは、さやまのりけり

(語釋) ねたしとれもひければ、かくつれなき女なれば、男は嫉くおもへ、其の容貌の美麗なるに、深く迷へるなれば、志はよく切になりまざるなり

(百五)むかし、男、みこたちのせうえらしたまふ所にまうで、たつた川のほとりにて

(語釋) せうえらほ、逍遙の字音にて、遊ひたのしむ義なること、既下入りのことは、古今集下二條後の東宮のみよす所と申しける時に、御屏風下、立田川にもみぢ流れたる圖かけるを題して、よめるごと、素性法師の「もみぢ葉のながれてとまるみなとには、紅をかき浪やたつた」といふ歌のつぎに、業平朝臣の歌とあるを、此の文に、端の詞をかへて、とりたるは、例の事なり

ちはやぶる神代もさかずたつた川

からくれなぬに水くゝるとは

(語釋) 立田川下、紅葉の流るゝは、紅にて水を絞り染めにしたりと見えて、其の珍らしき、さやまかりなし。神代には、珍らしき事、さまぐれも、其の神代にも、紅に水をくゝりやめたしたることは、聞き及ばずとなり。紅の下を、水のくゝる事とける説は、あやまりなること、更に論なし。○ちはやぶるは、神の枕詞なり

(百六)むかし、なまあてなる男のもとに、こたぢのりけり。それを、内記なりける。

藤原のとしゆきといふ人、よばひけり。

(語釋) なまあては、生上品の意なり。殊に、勝れて上品なりといふはあらず、なまぐれの上品なるをいふ。すべて、ナマとは、熱せざる義にて、生意氣、生書生なるのナマと同じ。○こたぢは、御達にて宮仕の女房にもいへど、こたぢは、ある貴女といふにはあらで、此の生あてなる人の、召しつかふ女をいふなり。○敏行朝臣は、ある説に、貞觀元年に少内記に任せられしよし見たり。此の昔、時代をばわぎと書きかへたれど、又、その人になき官をば、かゝぬ例なり。あして見るべし。○よばひの事は、前下入り

此の女、かほかたちはよければ、いまだわかければ、や、文もさまぐれからず、詞もさひまらず。いはんや、歌はよまざりければ、

(語釋) さまぐれは、立ち優りてはきくしたるをいふ。こたぢは、さまぐれにあらざれば、いまだ年若くて、文もはきくとは書き得ぬよしなり。おもふに、此の女は、十五六やらかのさまなり。○詞もいひしらすは、いまだ世なれずして、能書の詞のいひさまを知らぬよしなり

かのあるじなる人、あんをかきてやりけり。めでまごひにけり。さてをさこのよめる

(語釋) あんは、案にて、下書のことなり。○めでまごひにけりは、案外に、文の詞のよろしきをめでたるなり。○ある説に、此の女を、業平の朝臣の妹なりといへど、傳束なし。事のさま、妹ともあはしければ、さらば、兄人など書くべきに、あるじの男であるは、妹とせぬかきさまなり。此のことは、古



今集に、業平朝臣の家に侍りける女のもとに、よみてつかはしける、教行をあらたまて、業平朝臣の母、伊登内親王に仕ふる女のやうに聞こゆ  
つれづれのながめにまさる涙川

袖のみひちてあふよしもなご

(語釋) ながめは、物れもひながら見る意と、長雨をとかねたり○ひちては、ぬれてとさか同じ  
○一首の意は、連日つゞきて雨やまぬ比は、殊に、ものさびしく、ちよ／＼戀ひじきあまひのまされ  
ども、涙に袖のぬるゝばかりにて、あはるゝ様子もなしとなり

かへし、れいの女にかはりて、

(語釋) 例の主人が、女にかはりて、よめるなり

あさみこそ袖はひづらめなみだ川

身さへながるときかばたのまん

(語釋) あさみは、あさよの意なり○ひづは、濡るゝなり○一首のこゝろは、君が涙川のおまゝに  
ころ、袖はぬれぬ。さては、深く思ひ給ふとはたのみにしたし。身もながるばかりどうけたまは  
らば、たのみにしまゐらせんとなり。このうたは、萬葉に、「廣瀬川袖つくばかり涙きそや、心をかめ  
て我が戀あるらん」とあるを思ひて、よめるなるべし

とさへりければ、男いといたうめで、ふみばこにられて、もてありくとささ  
なる。

(語釋) 男、歌のれもしるきをめで、文箱に入れて、持ちありきて、したしき友たちなごには、見  
せなごしたりとなり

ちなし男、あひてのち、文たこせたり。

(語釋) あひてのち云々、前なるは、いまだ逢はぬうち的事、こゝなるは、逢ひて後の事なりと、こ  
とわれるのみなり

まうでこんどするに、雨のふりぬべきになん、見わづらひ侍る。身さへはひあら  
ば、此の雨はふらととさへりければ、れいの男、女にかはりて、よみてやらす

(語釋) まうでこんどするに、参らんとするにの義なり。これより、雨はふらととさへまふは、男  
の文の詞なり。今、参らんとするに、雨のふるを厭ひ煩ひぬ。此の身、もし、侍侍なる身ならば、かく  
折あしく、雨はふるまじと、極めて切なる情をあらはしたるなり○れいの男とは、彼のふるむの男  
のことなり。此の邊の文、簡にして意をかし

かす／＼におもひおもはずとひがたみ

身をこる雨はふりつゞまされ

(語釋) かす／＼には、今の言に、深切にさかか如し○とひかたみは、問ひ難むの意なり○  
身をこる雨とは、そなたが、眞實、深く我をたもつか否かために見る雨なりとの意なり○一首の  
こゝろは、深切に、そなたがたれもあか、おもはぬかは、問ふとも知りかたし。何時も、休よくおもふよ  
しにのたまへばなり。さるに、今、雨のふりまはるは、そなたの深切のほどを試驗するに、淋、便宜な



り。此のふりしきる雨にぬれつゝ見えなば。深切なりと知り。見えすば、おもはぬ身と知るべしとの意なり。この歌の解、舊説いかゞ。新釋よろし

とよみてやれりければ、みのも笠もとりあへず、こゝにぬれて、まどひきなけり

(語釋) しては、雨に、いたくぬれたるをさきと云。今言に、ヒシキヨリなどいはんが如し。男は前の歌を見て、おもふか思はぬかを、雨にためすとの事なれば、笠笠を着る暇もなく、雨にぬれつゝ、まどひ來にけりとなり

(百七)むかし、女人のこゝろをうらみて  
風ふけばどはに涙こそいはなれや

わがこゝろも手のかわく時なき

(語釋) とはは、常磐の畧にて、つねた、つもの意なり○涙です岩なれば、岩なれば下々の意なり○一首の意は、我が衣手のかわく時なくぬるは、つねた、涙こそ岩なれば下や、まてく、涙の多き事となり。さてはしの詞にて、涙はうらみの涙なる事をしらせたるなり○此の歌は、貫之集にあり。又、新古今集にも、戀の一下出で、貫之のうたなり。但、共下「岩なれば下」磯なれば下」とあり。S.の句をかへて、例のつくりなせるなり

とつねのことくさつらひけるをさきにおよびける、男

(語釋) 右の歌を、女がつねの言をさつらひけるよしと、男が聞きおよびて、つねの歌をよみける

よしなり

よひごとくはつかはづのあまたなく田には

水こそまされ雨はふらぬや

(語釋) よひごとくには、蛙は多く響になくものなればいふ○水こそまされ云々は、蛙の鳴くことより、鳴けば、涙もあるものなれば、その蛙のなく涙に雨はふらぬや、水まざるが如く、我が涙もあほしとなり○一首の意は、そなたは、衣手のかわく時なく、涙はほしといはるれども、我が涙も、決してうれにれとらず、たとへていは、響ごとく、蛙のねほく鳴く田には、雨あらずして、水まざるが如き涙なりといひて、涙のねほきを争ひしなり。さてその涙の多きは、愛事をほきしるしなればなり。拾穂抄、臆断などの説はいかゞ。前にもいへるが如く、贈答のうたは、すべて、かく先方よりいひおこせる事を承けて、争ふさまにいかがつねなり

(百八)むかし、男、友たちの、人をうしなへるがもとにやりける

(語釋) 人とは、思ふ人の意にて、妻などをいふなるべしと、新釋にいへるが如し

花よりも人こそあだになりけれ

いづれをさきにこひんどかみし

(語釋) 花は、はかなくあだなるものなるに、此の春は、うの花より人こそはかなくなりたまへれ、君は、かねて、花と人といづれかさきに戀ひしたはんと思ひ給ひし、必、花をとおもひ給ひしならん。しかるに、花のちらぬるきに、思ふ人を失ひ、戀ひしたは給ふことよと、歎きたるなり。みしは、



思ひしの意なれば、花につきていふなれば、かくいへるなり○此の歌は、古今集、哀傷の部に入りて、詞書に「櫻をうゑてありける下、やゝ咲きぬべき時に、かの植ゑたりける人、みかりければ、其の花を見てよめる、紀茂行」とあり。こゝも、はての詞に、少く花のことあらば、歌の意は、一段なるべし

(百九)むかし、男、みをかにかよふ女ありけり。それがもとより、こもひ夢になん見えたまひつるといへりければ、男

(語釋) みそかには、密かになること、屢いへり。密かに通へる女の群より、手紙にて、今宵、うたゝねの夢に、君を見て、いと戀ひしなごいひよこしたりとあり

おもひあまりいでにしたまのあるならん

夜ふかく見えばたまむすびせよ

(語釋) たまむすびといふ事は、當時の物語書にたほく見えたり。諺に、人だまを見て、「魂は見つぬしはたれどもしらぬぞも、むすびをむする下かへつた」三たひ唱へて、衣の下かへつたまを結ぶ事といへり。此の謎の歌は、あるきものにはあらざるべし。されど、魂むすびといふ事のあるくよりいへる事なるは、論なし○一首の意は、しのひ逢ふ中なれば、却りてれもひ切にして、魂のうかれ出でにし事もあるならん。そなたのうたゝねの夢に見えつるは、すなはち、其のうかれたる魂なるべし。猶、夜ふかく、魂の見えなば、魂むすびして、そなたとよめ給へとなり

(百十)むかし、男、やんごとなき女のもとに、なくなりける女をよらふやう

にて、いひやりける

(語釋) やんごとなきは、貴きといふ。貴女のもとにありける女下、しのひて通じけるが、なくなりければ、それを指さやうにて、主の貴女に、ほのかにおもひを漏らしたるなり

いたしへはありもやしけんいまださる

また見ぬ人をこふるものとは

(語釋) この歌は、心おほかた明らかなり。いかにいへは、ありもやしけん、それは、いと知らず。また見せぬ人を、戀ふるものとは、我が身には、今ぞ知りぬとなり。よてかくはかなきものれもひをする事かなといふ意を含めたり。又、表面の意は、いひよらんとするほどに、なくなりたる女を戀ふるよしにて、裏面には、未、しらぬ主の貴女を慕ふてゝるをこめたるなり

(百十一)むかし、男、つれなかりける人のもとに

こひしとはつらにもいはじ下紐の

とけんを人はそれとこらなん

(語釋) 戀ひしと、殊更にいはいはじ、我が戀ふるしには、必、君が下紐解けん、其の度こそ、我が戀ふる事を知れかしとなり。古諺に、人にこひらるれば、下紐とくといひならへる事あれば、かくはいへるなり○この歌は、後撰集、戀に、女のもとにつかはしける、在原元方とあるなり。こゝも、例のあらぬまにかきかへたるなり

かへし



した紐のこるごとするもあらなく

かくるかごとはかけすうあるべき

(語釋) しか懸るるごととせよとのたまへと、我が下紐はをけじ、かくばかりいたづらなるらよせ言は、いひかけ給は有るべきものか、これは、その言なりといふ必なり。あるを懸るたのみて、いひやりしに、しるして見おすを答へられしは、おもしるべきなり

(百十二)むかし男、ねんころにいひちぎりける女の、ことさまになりければ

(語釋) ことさまになりければ、異様になりければにて、今まで懸親なりし女の、異男に契りて、心かはれよしなり。さては、うらめしく悲しくおもふべければ、かくいひて、歌のこゝろを深からしむる、例の巧なり

すまの誓のこほやくけふり風をいたみ

おもはぬかたれたなびきにけり

(語釋) すまのあまの鹽焼く煙、風のはげじとに、彼方へは離くまじと思ひしに、案外にも、彼方へなびきぬる事よとなり。我がおもふ女の、あらぬ方になびきつきたるをたとへたり○この歌は、古今集の戀にあり。萬葉に「つなの浦に鹽やく煙夕されば、行き過ぎかねて山にたなびく」又「しかのあまの鹽やく煙風をいたみ、たちはのほらで山にたなびく」などあり

(百十三)むかし男、やもめにておて

(語釋) やもめは、和名抄に、無妻曰嫁、(夜無乎)無夫曰寡(夜無女)とありて、老いて夫なきをヤモ

メといふこと、更に論なし。されど、此の比より、男女、通じて獨居せるものを、ヤモメといひきと見えたり。今の世にも、いふことなり。又、支那も、同じ事にて、孟子の註には、老而無妻曰嫁、老而無夫曰寡とあれど、爾雅には、凡無妻無夫通謂之寡とも見えたり

ながらぬいのちのほどにむするゝは

いかにみじかきこゝろなるらん

(語釋) 逢ひたる女の念れしのも、男はなほ慕ひて、男女をも呼ばて、やもめにてありつゝ、恨みてよめるなり。一首のこゝろは、聞こえたるが如し

(百十四)むかし、仁和のみかど、せり河に行幸したまひける時、なま翁の、今はさる事にげなくおもひけれど、もどつきにける事なれば、大たかの鷹がひにて、さむらはせたまひける。

(語釋) 仁和のみかどは、光孝天皇を申せるなり。仁和は、其の御代の年號なり、芹河行幸のことは、仁和二年十二月十四日なること、三代實錄に見えたり。うのをりの事なるべし○なま翁とは、生翁の義にて、いたく年老いたるにはあらぬをいふ。年老いては、鷹飼は似合しからずともひけるなり○もどつきにけるとは、はじめより、鷹飼の方につきにけることなればといふ心なり○大鷹のたかかひとは、大鷹飼、鶴飼とてある、その大鷹の鷹飼なり。西宮記、十一の巻に見えたり○さて此の行幸の時、行平、供奉にて、翁さび々々とよまれたる事、後撰集に入りて、うたがひなし。さるべし、此の物語にては、業平朝臣の供奉して、よめるが如くつくりなしたり。此の朝臣は、此の時、已下卒



せられて、七年ののちなるを、猶、かくも作りなせるは、此の文のつねなりと知るべし

すりかりぎぬのたもとに、鶴のかたをつくりて、かきつけける

(語釋) すりかりぎぬは、摺狩衣なり。西宮記十一の卷、王卿衣服の條に、大鷹々飼者着地摺獵衣とあるこれなり○つるのかたをつくりて云々、これは加茂祭に放免のものゝきものにつくり。花をぬひつけたるごとく、作りたる鶴のかたを、袂にぬひつけたるなるべし(加茂祭放免の圖は、伊藤講師の徒然草講義、第二十五號に、其の圖をのせたり参照すべし)○さて後撰集に、嵯峨の帝の例にて、芹川に行幸したまひける日、在原行平朝臣「さかの山みゆきたえにせり河の、ちよの古道あとはありけり」又同日、たかひにて、狩衣のたもとに、鶴のかたをぬひて、書きつけける、同人「翁さび人などかめそ」云々とあり。これを以て、かけるなるべし

翁さび人などがめそかり衣

けふばかりとぞたつもなくなる

(語釋) 翁さびのさびは、すさびの意にて、手すさび、口すさびなどすさびに同じ。すさびは、もと進で「さ意」其の方に心の進むをさ。こは、翁の心やり、摺狩衣のたもとに、鶴のかたを縫ひなど、翁の狩場のなかりにおもひやり、かくはれやかなるさすしたりとなり。それを、人のどがひるなかれとなり。さて下の句下、今日ばかりと、名褒のさすたりとさす、ことわれるなり。それを、鶴にうつしていへるなり。鶴も、鷹とさるれば、今日ばかりと思ひて、聲たて、鳴く、それを同じことなりとさふ必なるべし

おほやけの御けしきあじかりけり。おのがよはひを思ひけれど、わかいらぬ人は、きゝおひけりとも

(語釋) おほやけは、天皇の御事なり○御けしきは、御氣色にて、御心に障りたるゆゑ、みけしきあじかりきとなり○おのがよはひを云々、記者の詞なり、帝も今年五十七でればしければ、御身に聞き負ひ給ひて、御けしきあじかりつらんとなり。されど、わかいらぬ人は云々といふを、たゞちに、天皇の御事に見たる説は、わるし、これは、なべての人を、記者がいへる詞なり。しかし、天皇の御けしきあしくおはしけるも、之を聞き負ひ給ひしゆゑなりと知らせたる文なり

(百十五)むかし、みちの國にて男女すみけり。都へいなんといふ。此の女、いとかなじうて、うまのはなむけをだにせんとて、おきのぬ、みやこしまといふ所にて、さけのませてよめる

(語釋) みちの國は、陸奥の國をいふ。都の男、陸奥の國へゆきて、女を住みしが、再、都へいなんといふをりの事なり○そまのはなむけは、馬の鼻向にて、もと旅行する人の馬を、その方へ向けて、わかれをつくるよりうつりて、たゞ、饑別の意にいふ詞となりぬ○おきのぬは、沖の井、みやこしまは、都島なるべけれど、此の名所、陸奥の國にあるべし。されど、その所は今知られず○又、一本だ、この一々たりのはなしなし。落ちたるなるべし

おきのぬて身をやくよりもかなじきは  
みやこしまへのわかれなりけり



(語釋) ねきは、熾なり。熾は、和名抄に、和名、オキト、猛火也とあり○一首の心は、熾を身にすゑてゆくは、あつく堪へがたきものなるが、それより、一段かなしく堪へがたきは、君は都へ、吾はこの島邊(陸奥の國)へのこる別なりけりとなり○この歌は、古今集の物の名に、沖の井、都島をかゝして、小野小町がよめる歌なるを、かくはし書をつくりて、一條の物語としたるなり  
 とよめりけるためぞ、とよりにけり

(語釋) 聞てえたるが如し

(百十六)むかし、男、すゝろに、みちの國までまどひいきけり。京におもふ人はいひやる

(語釋) すゝろは、前にもいへるが如く、案外に、又、漫になを譯すべし。都の人の行くまじき、遠國

へまどひ行きたる意なり

なみまより見ゆるこじまの濱ひさき

ひさしくなりぬ君にあひみで

(語釋) 此の歌は、萬葉の「浪間より見ゆる小島の濱久木、ひさしくなりぬ君にあはすして」とあるを、少しなほして、一條としたること、明らかなり○上の句は、久しといはんための序のみ。君に合はずして、久しくなりぬ。まことになつかしとなり○ひさ木は、濱邊に生ふる楸のたぐひをいふ。萬葉に、「吉野にて赤人(ぬば玉)の夜のおけゆけば久木たふる、清き河原に千鳥しばなく」など見えたり

何事もみなよくなほりにけりとなんいひやりける

(語釋) 古意にいはいく、むかし放縱なりし事をも、今はよくなほりたりといへり。此の詞、たゞに見ては、此の文の意にかなはず云々。此の説よろしめるべし。今までは、好色なる心のすゑに、本の妻をば、大かたに思ひてありつるを、よる心なほりてより、今更になつかしく、おぼゆるよしの歌をよみてやり、又、昔、放縱なりしことの、皆、なほりたりといひやれるよしなり

(百十七)むかし、みかど、住吉に行幸したまひけり

(語釋) 本居宣長翁いはいく、此の條、すべて詞足らず、他條の例に似ず、歌も誰か歌をもわかまへがたく、神の現形も、俄なり。他條の例にいはいは、「むかし、男、帝の住吉に行幸したまひける御供に仕かまつりてよめる、「我が見ても」云々とよめりければ、大神云々などいふあるべけれ云々と、此の説、まことなる事なり。此の條は、詞をまたかきせざるものと見たり

我が見ても久しくちりぬ住吉の

きこのひめ松いく代經ぬらん

(語釋) おほかた聞てえたるが如く、住よしの岸のひめ松は、我が見來たりてよりも、年久しきものなるに、其のはじめ生ひるめし時より、今までは、幾代か經しならんとなり○此の歌は、古今集に、題しらす、よみ人しらすとあるを、はしこの詞をつくりて、一條の物語としたるなり

おぼん神びきやうしたまひて



(語釋) げきやうは、現形の字音なり。御神、形をあらはして、歌よみたまへりとなり。そのゆゑは我が見ても、歌に感じ給ひきとやうに、かきなせるなり  
むづましと君はまらさずやみづかきの

久しき世よりはひそめてき

(語釋) みづかきは、久しの枕辭なり。○君とは、帝を申すなり。○いはひは、こゝは、守る處なり。○一首のこゝろは、我むかしより朝廷を守りて、今も、なほ、君を守ることをなれば、むづましと、君は知り給はずやと、神のたまふてゝるなり

(百十八)むかし、男、ひとこくおとせせで、あするゝこゝろもなし、まわりこゝろいへりければ、女

(語釋) 久しくおとせせで云々、久しく音信もせぬ人の、参り來んといふは、首の上のみ、体較つくるひさを知らせたる文なり

玉かづらはふ木あまたになりぬれば

たえぬことのはうれしげもなし

(語釋) 玉葛の、あまたの木にはひろたりたるやうに、君は彼方此方へ、体よき言ひはるゝ事なれば、音信のたえぬのみは、格別、うれしと思はずとなり

(百十九)むかし、女、あだなる男のかたみとて、れきたるものどもを見て

(語釋) あだは、前にいへり。○かたみは、形見の意にて、昔、ありつる人の形のかはりた、其の物を見るゆゑにいふ。遊仙窟に、念記の字をカタミと訓めり  
かたみこそ今はあたなれこれなくば

あするゝ時もあるまじものを

(語釋) 形見こそ、今は敵なれ。これなくば、まぎれて忘れらるゝこともあるべきことなり。これは、古今集に、題しらす、よみ人しらすとある歌なり

(百二十)むかし、男、女のまだ世經ずとおぼえたるが、人のもとに、志のびてものきこえてのち、ほどへて

(語釋) 此の處、および、次の歌の解、新釋の説よろし。其の文にいはく、男女の中を世といへば、まだ男にあはぬ女ならんとおぼはるゝを、女のまだ世へす云々といへるなり。しかるへるは、わかき女に、ものいはんとすれども、つれなきに、こはまた世へぬ女なれば、うひくしくして、かゝるならんとおもひをれるよしなり。歌につれなき人のといへるを、合はせ見るべし。よてやうにおもひしは、目きゝたがひにて、その女、異人にしのびてあへるなり。其の後、ほどへて、あまたの男にやあひつらんとおもひにくみて、歌よみてやるなり

あふみなるつくまのまつりどくせなん

つれなき人のなべのかず見ん



(語釋) つれなき君を、近江の國の、筑摩の神の産子にして、祭にかつきたまふ、なへの數見たらんには、さうあまたならんと思ふに、はやく見まほしければ、其のまつりごとくせよかしといふ意なり。かくいふは、彼の神の祭には、女の一生のめひだ、あへる男の數ほど、なべをかづきてわたるといふ事のめればなりけりと、例の新釋にいへり○近江の筑摩は、御厨なれば、延喜式なると、おほく出たり。此の神は、文德實錄に、仁壽二年二月、授近江國筑摩神從五位下と見へたり

(百二十一)むかし、男、梅つぼより、雨にぬれて、人のまかりいづるを見て

(語釋) 梅つぼは、内裏の擬花舎のことなり。前庭に、梅を栽ゑたれば、梅壺ともいふなり。藤壺、桐壺などいふ、皆この類なり○まかりとは、尊き所より、賤き所へ行くをいふ。まゐるといふ語の反對なり。然るに今の世に、人の許へゆくを、罷り出づといふは、古言の意に叶はず  
うぐひすの花をぬふてふかさもがな

ぬるめる人にきせてかへさん

(語釋) かへは、例の願望の意○ぬるめるは、濡るゝやうすといふ義なり○此の歌は、今古集下、「露の笠に凝まつて梅の花、をりてかゝるん者かゝるや」とあるなるにによりて、肥者のよめるなるべし○一首のころは、露の梅の花をぬふといふ笠もかゝる、其の笠を、ぬれてゆく人下きせて、家にかへさんといへるなり

かへし

露の花をぬふてふかさもがな

おもひをつけよほじてかへらん

(語釋) 雨にぬれて、梅つぼよりまかるを、露の凝まつて花笠きせて、かへさんばやとのたまへる、これをほしからず、たゞ、うなだの思ひを付けられよ、とらば、袖をほじてはるかへるべしと云ふ。おもひのひを、火にとりなしたるなり

(百二十二)むかし、男、ちぎれる事、あやまれる人に

(語釋) 契れる事を、怠れたる女にいひやるなり

山ころのわでの玉水手にむすび

たのみじかひもなき世なりけり

(語釋) この歌は、六帖にも見え、又、新古今集戀にもあり○むすびは、袖の字をまつ。すくひ汲むことなり。玉水を掬ひてたのみしと言ひかけたるにて、上の句は序なり。たのみしのたを隔て、のみしに掛けたる序なり○玉水は、袋草子に、井出の玉水を、めでたき水ありて、性涼の人、手にひすびて、のむといへり。玉は、ほめていふ詞なり○一首の意は、おほかた聞てえたるが如く、約束せる事を深くたのみにしたらしかひもなき世にて、かく隠れられたりと、恨み歎きたるなり  
といひやれど、いらへもせず

(語釋) かく恨みなげきて、いひやりしかる、女よりは、つひた、替もせむらきとなり。これは、女に



は、あるまじきにくきしわざなるを擧げて、次條の、まことある女のまこと、つよく聞かせん料なるべし

(百二十三)むかし、男ありけり。深草にすみける女を、やうくあきがたにやおもひけん。かゝる歌をよみけり

(語釋) あきがたにや云々は、厭方にや思ひけん。出で、去んとする歌よめりとなり○これは、古今集、雜部に、深草の里に住み待りて、京へまうで來とて、そとなりける人に、よみておくりける、業平朝臣とありて、此の前後、友だちなきの贈答せる篇なれば、是もしたしき人におくりつらんを、此の文には、夫婦となりて、住みける女にむかひて、よめる事をつくりかへたり。されど、古今集でもかへしは、よみ人しらすとあれば、女にてもありけん。其のつぎに、男もちの贈答も、戀の如くよみたるに由るに、たゞ、したしき女とは知られたり

いとく深草野とやなりなん

(語釋) 年を経て、いたく草をかき住みなしたる郷を、我がすて、いなば、まことの野とやならんといひて、所の名の深草野と、巧に詞になしたるなり。歌のこゝろは明らかなり

女かへし

野とならばうづらとなりて鳴きをらん

かりにたにやは君はこころん

(語釋) 君のおほせらるゝ如く、果して野とならんには、吾は鶉となりて、鳴き居らん。しかもた、君は待ただた、來給はせよふべしとの心なり○鶉は、あれたる野下らるものなれば、年を経て、住み下しやどの、いたくあれたるを知らせたるなり

とよめりけるため、ゆかんとおもふころろ、なくなりけり

(語釋) 前の條には、男のしたへども、女のまことなきをいひ、こゝには、男のあきがたになりて、出で、いなばとすると、女のうらむるけしきもなく、たゞ、野とまるまゝに鳴きをりつゝ、いさせめて、待てんとすかをたに待ち居らんをけかきりなき女のまことをめ、男のともまれる事をいへり。作りなしたるものといへど、これを讀むとき、あはれすゝよめるはなし。されば、此のころを添へんとて、巧に、はしの詞をかへ、はたそれか、男女の中らひをいふ終なれば、いとまたはれたりし事をもの末に、しかしながら見る人、心をせよとて、記者の心せるにやあらん。見よく、次の二つの條に、故あるつらねまなるを、古意にいはれたるは、卓見といふべし

(百二十四)むかし、男、いかなりける事をおもひけるをりにか、よめる

(語釋) いかなる折とあらはさずして、かくいへる、なかづくに、こゝろ深しおもふこといはでぞたゞにやみぬべき

われとひとしき人しなれば







從二位伯爵東久世通庸君題  
從三位子爵福羽美靜君題詞  
東京侍講本居豐顯大人閱

從三位末松謙澄先生叙  
從六位小中村清矩大人序  
松風增田于信君譯

# 新編紫史

一名通俗源氏物語

和本仕立 合本全十卷(二十冊)實價壹圓(二冊)金七十五錢宛  
洋紙摺 壹冊(則和本二冊合)實價四十五錢宛每冊郵稅六錢宛

新編紫史は源氏物語を通譯したるものなり夫源氏物語は我邦小説の巨擘にして空前絶後の大著  
施すもの殆ど四十家以下ならず然るも猶其讀み難く解し易からざるを以て後世の人其書と耳にして其  
文を目にせず是を以て京傳馬琴以上には小説なしと爲して徒に支那西洋の稗史に容れず其  
業ならずや松風先生嘗て大學に在りて本邦の文學を修め文辭尤精妙を推さる先此書を譯して  
易くこれを通讀するを得るの便を與へられたり文は會て原書の意を失はず語は古雅に偏せず  
に陥らば坊間刊行の小説に比すれば眞に玉石の別あり抑本書の利益は意匠の絶妙のみならず  
時の人情風俗及び京洛の景況宮中并に朝紳の有様等より一般の世態を詳に叙したれば人をして  
ものたり荷皇國人たるものは必先一讀すべきの珍書なり將た讀まざるを愧つべきの妙史なり  
●本書初帙及二帙共賣切の處今般再版出來仕候

發兌元

東京神田區鍛冶町四番地

誠之堂

や今國文學勃興の機運に際し弊堂此に見所斯學專門各大家の熱心  
な贊助を得編輯主任を置き國文學界と題する講義録を發行す本誌一  
る者斯學を修めんとする者境進に親しく師に就く事能はざるは  
る者教科の餘暇進んで大に研ぶる所有らんとする者或は  
志す者の必ず坐友に備へざるべからざるものなり

## 月刊 國文學界

第壹號 十一月一日發行  
一冊凡百頁 每日一頁  
日三回發行 一月三拾錢六  
月壹圓七拾錢 一年三  
圓三拾錢外郵稅二冊に  
付一錢替爲は●今川橋  
局宛●郵券代用一割増

●平治物語講義 國學院講師 今泉定介  
●萬葉集講義 高師範學校教授 島山直健  
●増鏡講義 國學院講師 落合直文  
●日本俗語文典 女子高等師範教授 松下大三郎  
●有職故實 專門學校講師 關根正直  
●言語學 專門學校講師 高橋龍雄  
●保元物語講義 城北中學校講師 三木五百枝

●落窪物語講義 前大學教授 内藤秋香  
●大鏡講義 第一高等學校教授 栗島山之助  
●古事記講義 國學院講師 久保龍惠  
●評釋撰錄土佐日記 專門學校講師 岡田正美  
●告檢定試驗志願者 文部檢定試驗委員 西村天因  
(餘興) 俗語評註

發行所 東京神田區鍛冶町四番地 (電話本局九百四十九番) 誠之堂 賣捌東京堂 ●上田屋 ●北條館 東海信文社 ●良明堂 其他各地



定價金八十錢

雙木園主人編述

# 江戸時代 戯曲小説通志

挿畫入り和裝半紙本全四冊美裝

郵税十四錢

若し。本邦に於ける。文學發達の最盛期を擧ぐれば。江戸時代に若くものなるべし。和漢の文學は。よて優き。殊に戯曲と小説とに於て。最も絢爛の結果を見る。蓋。群芳の蓄を斂り。百花の香を放つ。以て其の華美に啖ふるに足らざる也。况又。夜雨玉碎け。高山水落つるの妙響ある者に於て。を乎。近世英人動もすれば。エリキスエス朝を擧げて。其の文學の發達を誇る。然れども。本邦江戸時代の文學は。未必ずしも。之に下らざるなり。然るに。從來の習慣として。戯曲小説としいへば。婦人玩物の如く輕視し。嘗て讀者の取る所とならざりしは。實に一大恨事なりと云はざるべからず。要するに。戯曲と小説とは。社會の反映なり。人心の汚隆。邦家の盛衰共に。之と聯系して。相離れざるものなれば。其の源委流派の如きは。苟も文學に志あるもの。知らざるへからざるものとす。今雙木園主人。此に慨する所あり。近世に起れる。戯曲小説の事歴を網羅し。名けて江戸時代戯曲小説通志といふ。上は寛永慶安より。下は文久慶應にいたるまで。江戸開府以來。凡二百四十餘年間の文學歴史にして。第一篇。戯曲の部には。淨瑠璃本。及び演劇脚本の發達を叙し。併せて其の文例を示し。第二篇。小説の部には。浮世草紙。洒落本。人情本。草雙紙の發達より。遂に實録物。讀本。滑稽本の變遷沿革に及ぼし。又文例をも示せり。第三篇。傳記の部には。小瀬甫庵。鈴木正三。井原西鶴。近松門左衛門。竹田出雲。並木宗輔。福内鬼外。山東京傳。曲亭馬琴。式亭三馬。十返舎一九。爲永春水を首り。外數百名にかゝる。奇行逸話を採録し。殊に作者の肖像は勿論。淨瑠璃本。小説本の稱號凡數十種は。一々古風を模刻して。當時の真相を失はざらんことを務め。又年表。索引をも付したれば。極めて人名の搜索に便なり。希くは諸君子。一本を御購讀の上。近來の奇書なりと賞し賜はし。弊店の光榮。之に過す。

注意一此の種の書籍は近頃社撰の類書多し購客各書林に就き或之室出版雖々著の何書と御指名にて

生田目經德編 和本全八冊

## 高等女學校 女子師範學校 校教科用書

# 新定 女子國文讀本

定價 從一至四各金廿貳錢 從五至八各金廿五錢

この書は著者が女子教育に従事せるを以て其授業の經驗に富み且女子の眞性を熟知し嘗て適當なる高等女學校國語教科書なかりしを憂へて編する所なりされは編纂の體裁事項皆當時の情勢に合し實地に適せざるはなし其材料の撰擇を略記せば高尚貞淑なる女徳を涵養し家政經濟其他婦人に必要の事を輯録し歴史地理及すべての學科との關係をはかり文章の難易雅俗を考へ往々和歌を交へ載せて文學の趣味を覺知せしむるを務め授業の時期を量りて成るべく其季節のものを擧げたり又學年週時を測り每卷の紙數を定め最授業習得に便益ならしめ尙女子師範學校の教科にも應用せしむべく每卷に完結したり編纂の意を用ひたる未この書の如きものを見ざるは閱者のとくに了知する所なり

發行所

東京市神田鍛冶町(電話本局九四九)

誠之堂書店







